

平成3年度

市原市内遺跡発掘調査報告

山倉前畑遺跡

川在南障子遺跡B地点

六孫王原遺跡E地区

1992・3

市原市教育委員会

序 文

市原市は首都圏に位置することから、ここ20数年の間に急速に成長し、道路整備、住宅建設等の都市基盤整備事業等が続々と行われてまいりました。

このような開発は、現代に生きる住民にとって、よりよい生活環境を提供する反面、祖先の残した貴重な文化遺産の破壊につながることもあり、開発と文化財の保護との調和をはかる必要性が高まっております。

このような状況の中で、今回国庫及び県費の補助を受けまして、開発に先だち市内に所在する遺跡について調査を実施し、その性格等を把握することができました。本書はその成果をまとめたものであります。学術的な資料としては、もとより、文化財の啓蒙と普及のために広く市民の皆様にも活用していただければ幸いです。

最後に、今回の発掘調査を実施するにあたり、ご指導ご協力を賜りました文化庁・千葉県教育庁文化課・(財)市原市文化財センターならびに関係機関に対し、心より感謝を申し上げます次第であります。

平成4年3月

市原市教育委員会
教育長 星野一郎

例 言

- 1 本書は国費および県費の補助を受けて市原市教育委員会が主体となり実施した市内に所在する遺跡における発掘調査の報告である。
- 2 発掘調査及び整理事業は文化庁の国庫補助事業として補助金を受けた市原市教育委員会の依頼により、財団法人市原市文化財センターが実施し、報告書刊行については市原市教育委員会で行った。
- 3 今年度実施した発掘調査は下記のとおりである。
 - (1) 山倉前畑遺跡(センター調査コード134)市原市山倉字前畑475-5
調査 個人による専用住宅建設に伴う発掘調査で、工事に先行して遺跡の規模、状況等を把握した。調査対象面積331.1㎡のうち35㎡について確認調査を実施し、建物建築部分30㎡に対して本調査を実施した。
調査期間 (確認調査)平成3年5月28日～5月30日
(本調査) 平成3年5月31日～6月7日
 - (2) 川在南障子遺跡B地点(センター調査コード135)市原市川在南障子574-3、573-3の一部
調査 個人による専用住宅建設に伴う発掘調査で、工事に先行して遺跡の規模、状況等を把握した。調査対象面積665㎡のうち66㎡について確認調査を実施し、建物建築部分、進入道路部分合わせて217㎡に対して本調査を実施した。
調査期間 (確認調査)平成3年7月17日～7月24日
(本調査) 平成3年7月25日～8月12日
 - (3) 姉崎六孫王原遺跡E地区(センター調査コード138)市原市姉崎字毛尻3220-10
調査 民間事業者の駐車場造成に伴う発掘調査で、工事に先行して遺跡の規模、状況等を把握した。調査対象面積は1000㎡のうち100㎡について確認調査を実施した。
調査期間 平成3年8月16日～8月30日
- 4 本書の原稿執筆は、高橋康男が行った。
- 5 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1:50000地形図「姉崎」および、市原市発行の1:2500地形図E-5、F-2・3、H-6・7である。
- 6 本書では調査範囲と遺構配置図および遺構平面図中の北は磁北を示し、遺構平面図及び断面図中の高さは、調査対象地内に仮設した基準杭の高さとの相対値を示すことを原則とする。

本文目次

序文

例言

第1章 調査遺跡の位置と環境	1
第2章 山倉前畑遺跡	4
第3章 川在南障子遺跡B地点	7
第4章 姉崎六孫王原遺跡E地区	29

插图目次

調査遺跡の位置と環境

第1図 平成3年度市内遺跡調査遺跡位置図	2
第2図 山倉前畑遺跡および周辺の遺跡	2
第3図 川在南障子遺跡B地点および周辺の遺跡	3
第4図 姉崎六孫王原E地区および周辺の遺跡	3

山倉前畑遺跡

第5図 山倉前畑遺跡および周辺の地形	4
第6図 山倉前畑遺跡全体図	5
第7図 001住居跡実測図	5
第8図 001住居跡出土遺物実測図	5
第9図 山倉前畑遺跡出土遺物実測図	6

川在南障子遺跡B地点

第10図 川在南障子遺跡B地点および周辺の地形	7
第11図 川在南障子遺跡B地点全体図	8
第12図 001住居跡実測図	9
第13図 001住居跡出土遺物実測図	9
第14図 002住居跡実測図	10
第15図 002住居跡出土遺物実測図	10

第16図	003～006および3トレ南端小竪穴実測図	11
第17図	ピット群検出状況	12
第18図～第31図	縄文土器実測図(1)～(14)	13～15・17～27
第32図	石器・土器片錘実測図	28

姉崎六孫王原遺跡E地区

第33図	姉崎六孫王原遺跡E地区および周辺の地形	29
第34図	姉崎六孫王原遺跡E地区全体図	30
第35図	姉崎六孫王原遺跡E地区出土遺物実測図	31

図 版 目 次

図版 1	山倉前畑遺跡
図版 2～6	川在南障子遺跡B地点
図版 6	川在南障子遺跡B地点・姉崎六孫王原遺跡E地区

第1章 調査遺跡の位置と環境

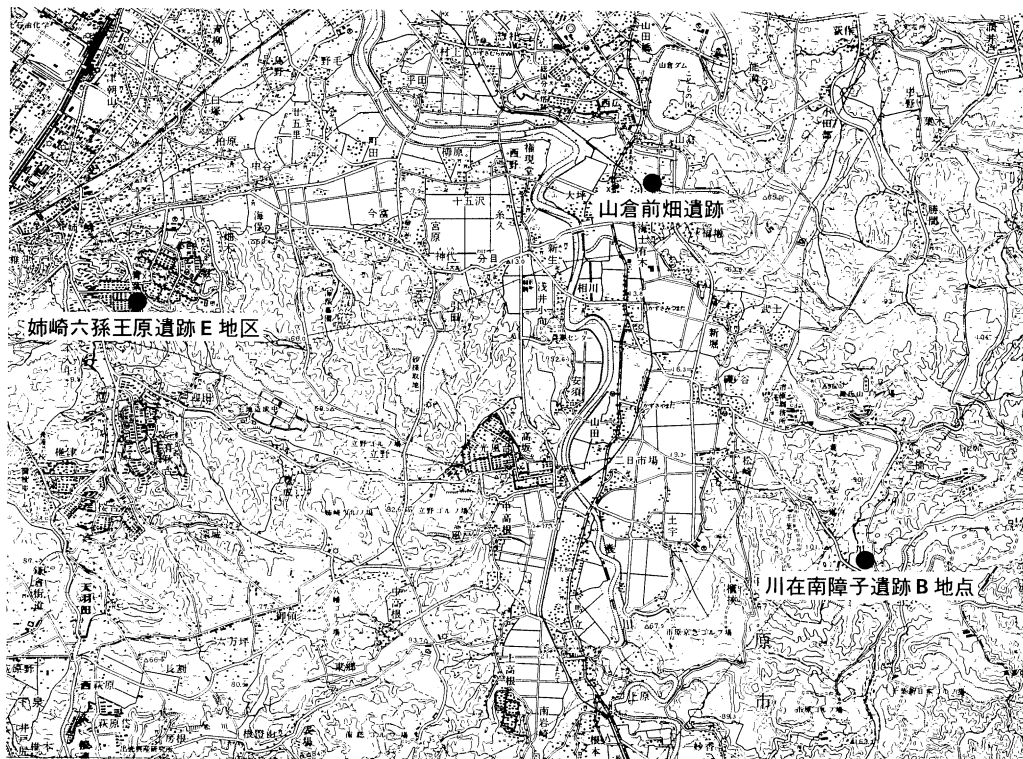
今年度の市内遺跡関係の調査は市域の北部3か所であった。ここでは、それら3遺跡の周辺の環境について、調査順に簡略に述べておく。

山倉前畑遺跡は、養老川右岸の段丘上に位置する。これまでに近隣箇所では発掘調査が行われたことはない。やや視野を広げて見るならば、北方の台地上にはいわゆる国分寺台の遺跡群があり、北東の山倉ダム周辺にも、山倉天王貝塚をはじめとして多くの遺跡が存在する。また、低地では、池ノ谷遺跡、新堀叶台遺跡と言った段丘上の遺跡が調査されている。昭和58年度に調査された池ノ谷遺跡においては、井戸跡等から平安時代を中心とする遺物の出土が認められている。「岡木家」とかかれた墨書や、灰釉陶器の存在が注目される場所である。新堀叶台遺跡は、昭和63年度から平成元年度にかけて調査が実施されたものであり、古墳時代の集落が調査された。なお、今回調査した、山倉前畑遺跡の西方において、金銅製の耳環が採集されていることも付け加えておきたい。

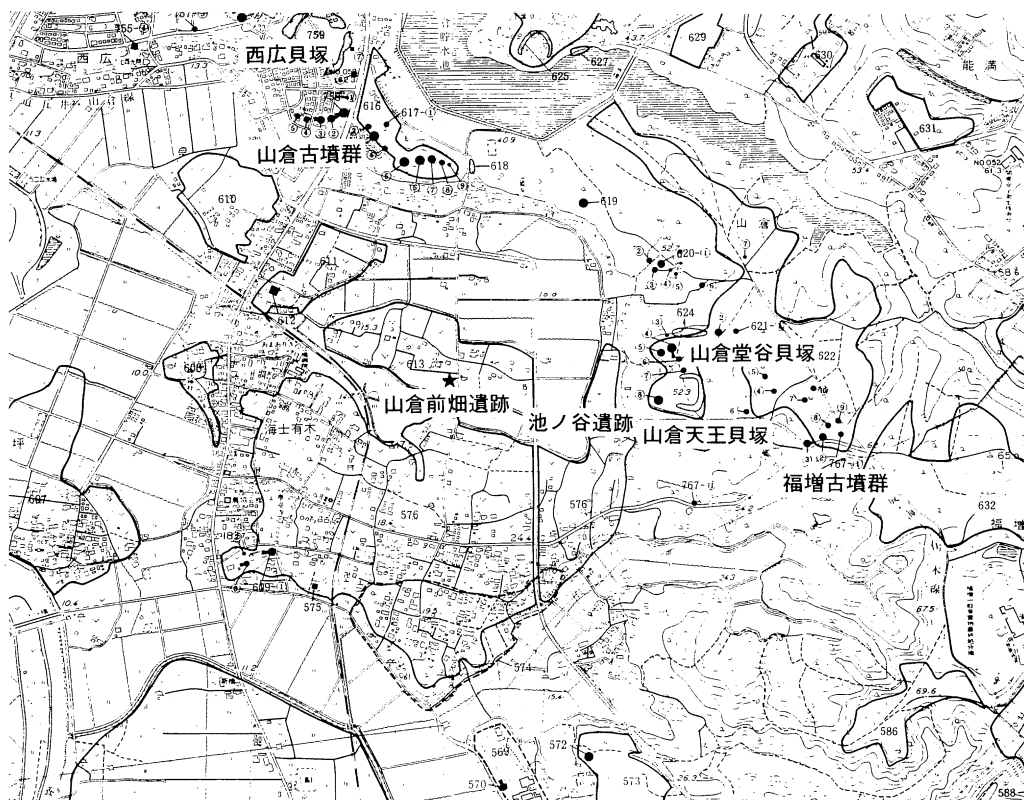
川在南障子遺跡B地点は、昭和63年度に調査を実施した川在南障子遺跡と同一台地上に存在し、小字名も同一であるところから、この名称が付けられたものである。63年度の調査に際しては、縄文時代早期の包含層が検出されている。当時より周辺に大量の土器が散布しているところから、集落の存在が予想されていた。今回の調査によって、その本体の一部が明らかになったといえるが、全体像の把握には、至っていないのは後述の通りである。なお、前回の調査箇所と今回の調査箇所において得られた遺物の時期も相違しているのも本来同一の遺跡と言いうるかどうかも今後の調査に委ねられる。周辺の状況については、いまだに調査の実施例がほとんどない状況である。

六孫王原遺跡E地区は、姉崎古墳群を形成する代表的な古墳である、六孫王原古墳を中心とする遺跡の一部であって、その名の示す通り、周辺においては数次にわたる調査が実施されてきている。同遺跡周辺に限らず姉崎古墳群周辺においても、多くの調査が行われている。姉崎宮山遺跡は、式内社である姉崎神社境内に所在し、姉崎東原遺跡は県指定文化財である姉崎天神山古墳に接する遺跡である。また、県指定文化財である姉崎二子塚古墳に近接する低地上では姉崎上野台遺跡が調査されている。また、本遺跡に隣接する毛尻遺跡においては方形周溝墓群が検出されている。いずれも、断片的な調査であり、姉崎古墳群全体を見通し得るものではない。いずれは、これら断片的な成果を総括する作業も必要と思われる。

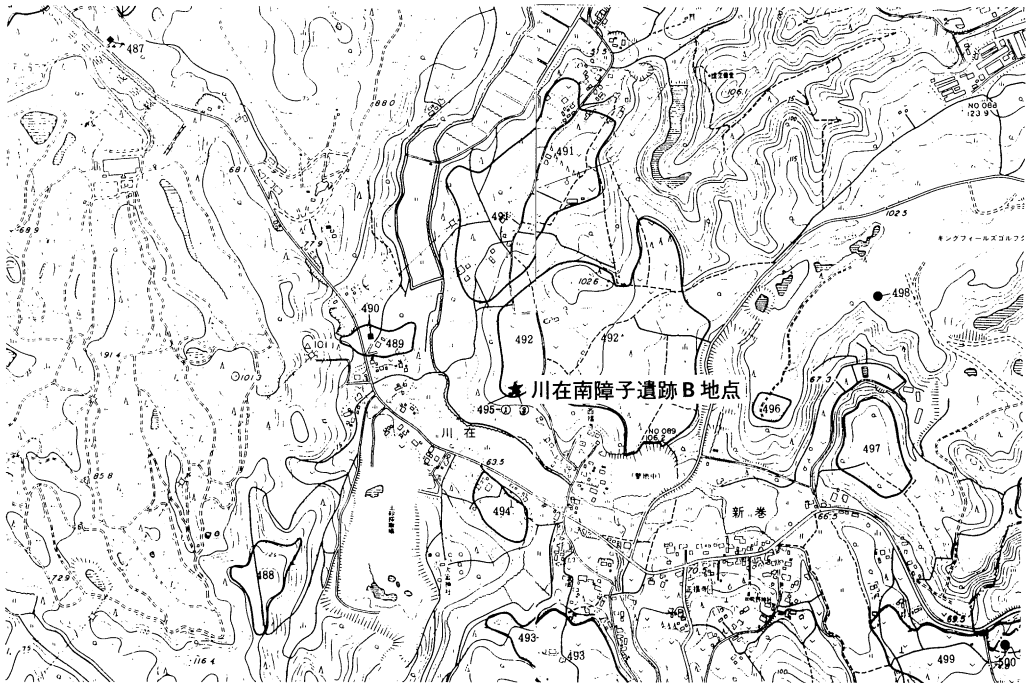
以上が、今年度調査を実施した各遺跡の周辺の状況である。これら成果と今回の調査において得られた成果の関連性については後論のなかで触れることとする。(なお、紙面の都合上文献については割愛させていただく。)



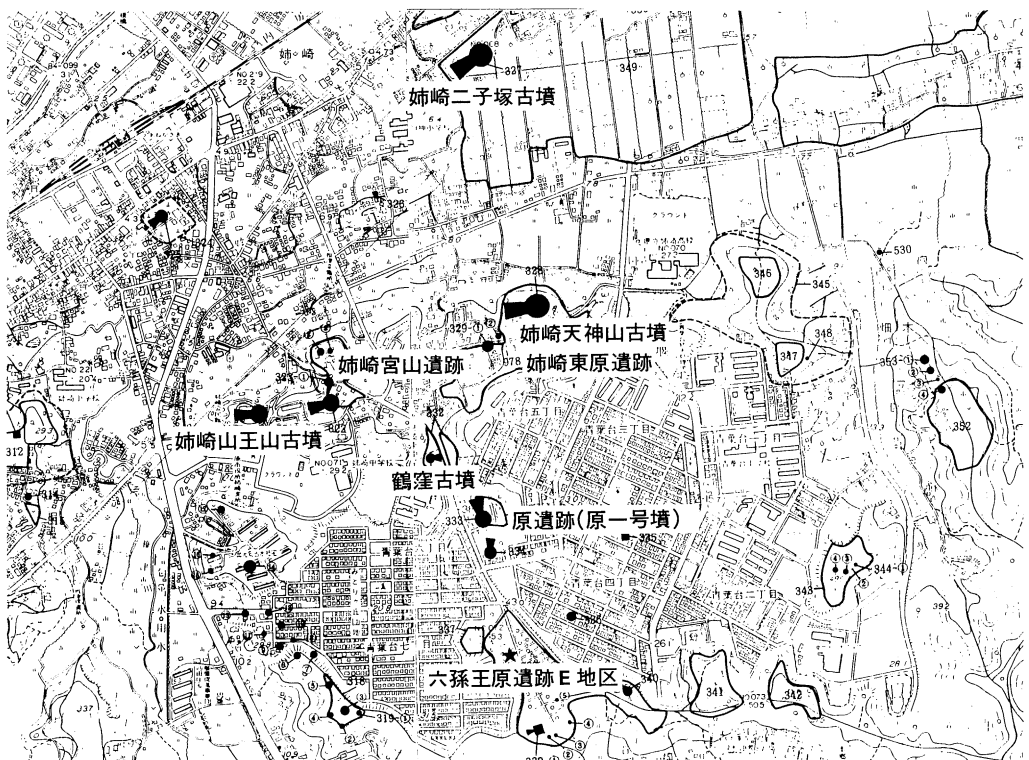
第1図 平成3年度市内遺跡調査遺跡位置図(1/10万、国土地理院1/5万「姉崎」を使用)



第2図 山倉前畑遺跡(星印)および周辺の遺跡(1/20000)



第3図 川在南障子遺跡B地点(星印)および周辺の遺跡(1/20000)



第4図 姉崎六孫王原遺跡E地区(星印)および周辺の遺跡(1/20000)

第2章 山倉前畑遺跡

1. 調査前の状況

本遺跡はかつては畑であり、遺跡周辺には土器の小片が散在しており、集落の検出が予想されていた。また、かつて縄なえ工場が存在したと言う話や、戦時中はすぐ北側に兵舎あるいは高射砲の陣地があったと言う話もあり、調査地点における遺構・遺物の遺存状況にはやや不安があった。

2. 調査の経過

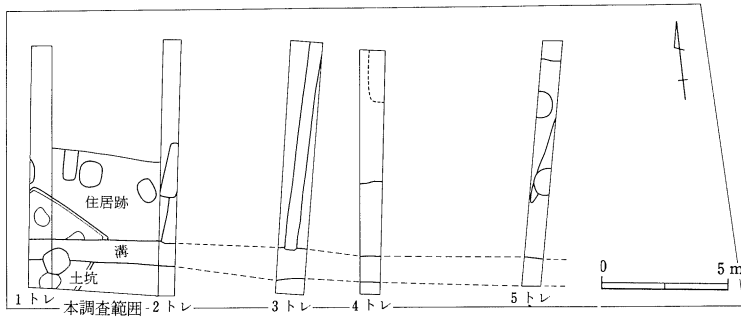
東西に長い調査範囲内に、南北方向のトレンチを5本設定し、遺構の分布状況について確認調査をおこなった。その結果、調査区の南西隅において住居跡が1軒確認された他、調査区の南限を区画するような形で溝が走っているのが確認された。そのほか、ほぼ南北に走る溝や硬化面の存在が確認された。この硬化面については土間を思わせるものであり、上述の縄なえ工場の一部である可能性が考えられた。この確認調査の結果を受け、住居跡を中心とする30㎡について本調査を実施した。

3. 遺構

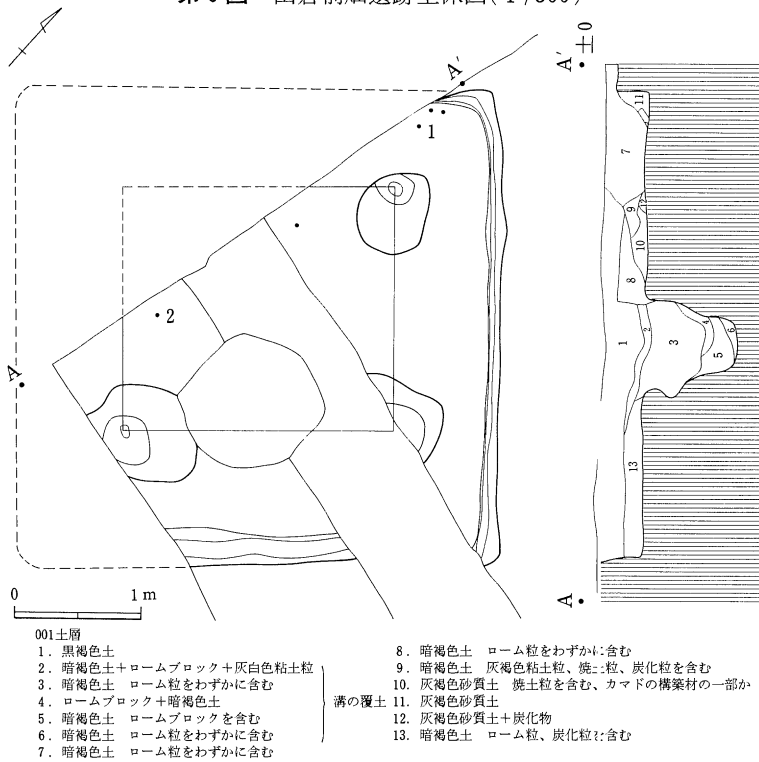
本調査の結果、第6図中に示したような遺構の分布が見られた。住居跡以外の遺構は遺物の



第5図 山倉前畑遺跡および周辺の地形(1/5000)

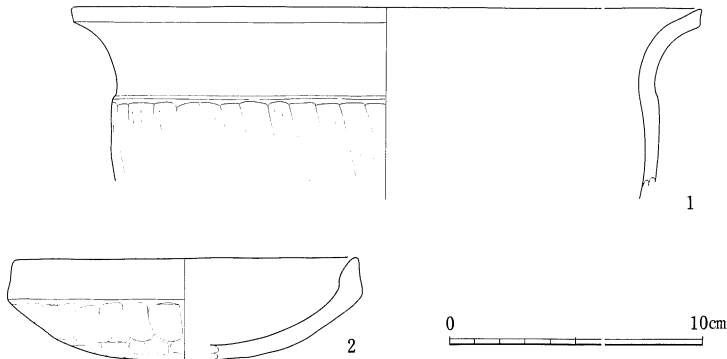


第6図 山倉前畑遺跡全体図(1/300)



- 001土層
- | | |
|------------------------|-------------------------------|
| 1. 黒褐色土 | 8. 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む |
| 2. 暗褐色土+ロームブロック+灰白色粘土粒 | 9. 暗褐色土 灰褐色粘土粒、焼土粒、炭化粒を含む |
| 3. 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む | 10. 灰褐色砂質土 焼土粒を含む、カマドの構築材の一部か |
| 4. ロームブロック+暗褐色土 | 11. 灰褐色砂質土 |
| 5. 暗褐色土 ロームブロックを含む | 12. 灰褐色砂質土+炭化物 |
| 6. 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む | 13. 暗褐色土 ローム粒、炭化粒?を含む |
| 7. 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む | |

第7図 001住居跡実測図(1/60)



第8図 001住居跡出土遺物実測図(1/3)

伴出もなく、時期の決定はし難いが何れも古く遡る物ではないと考えられる。

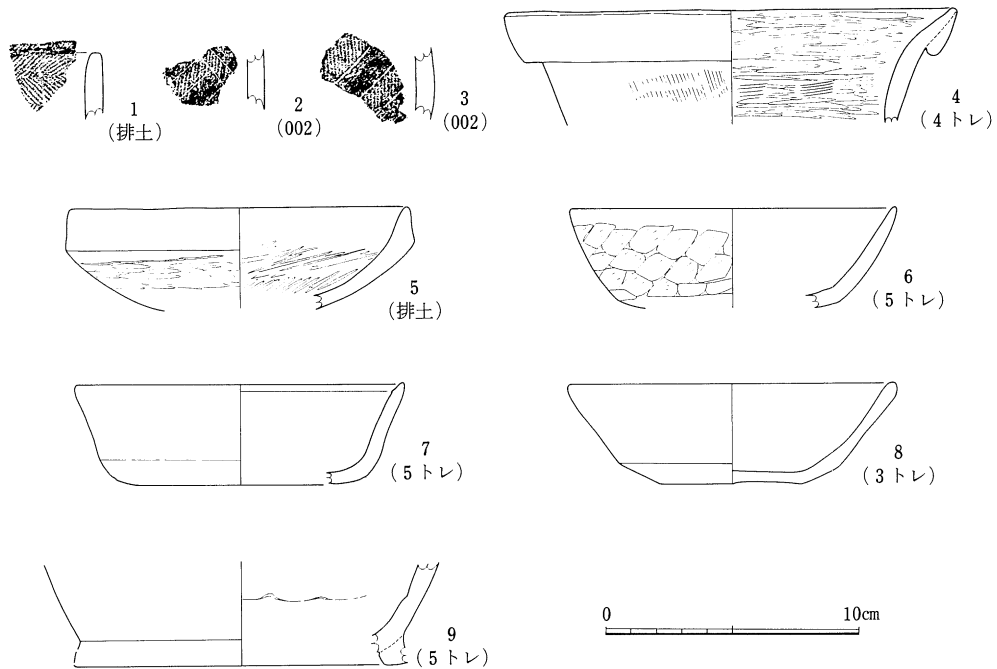
001住居跡

住居跡は、全体の約半分の部分の調査となったが、全体像の復元は可能である。

一辺約3.8m、柱穴間は約2.0mであって北側の柱穴の西側から支脚の破片が出土しているところから、ここよりさらに調査範囲外の方にカマドが存在することが想定される。したがって、住居の主軸は北西に持つと判断される。なお、拡張・建て替え等の痕跡は検出されていない。

柱穴の深さは、南隅、北隅のものともに、床面からの深さは約70cmである。

遺物は、上述したカマド付近から土師器の甕が、また、住居跡南側の隅の床上からは、同じく土師器の坏が出土している。いずれも、鬼高期に属する物である。そのほかに



第9図 山倉前畑遺跡出土遺物実測図(1/3)

カマド付近からは、砂質の支脚が出土しているが、遺存状態がきわめて悪いので図示し得なかった。

4. その他の遺物

上に述べた以外に、確認調査に際して出土した遺物には図示したようなものがある。いずれも遺構に伴うものではないと判断している。1～3は弥生土器、4～8はいずれも土師器である。2・3の施文は図ではやや不明瞭であるが、沈線区画内に、単節の縄文上に無節の縄文をまきつけた原体を回転させた文様である。6は8世紀代の、7～8は8世紀から9世紀にかけての所産と考えられる。9は、灰釉陶器の瓶の底部であるが、残存部分には発釉は認められない。時期についての確証はないが、平安時代の所産と思われる。

5. 小結

今回の調査により、古墳時代後期の集落の一部が検出されたことは、いままで実体がほとんど明らかにされていなかった、山倉地区周辺の歴史を復元していく上で、貴重な成果と言うことが出来よう。また、遺構に伴うものではなかったが、弥生時代から奈良・平安時代の土器が出土したことは、この古墳時代後期以外にも、断続的ながら、付近において集落が営まれていたことの証左と言えよう。今後の台地上以外の部分における成果の蓄積が望まれるところである。

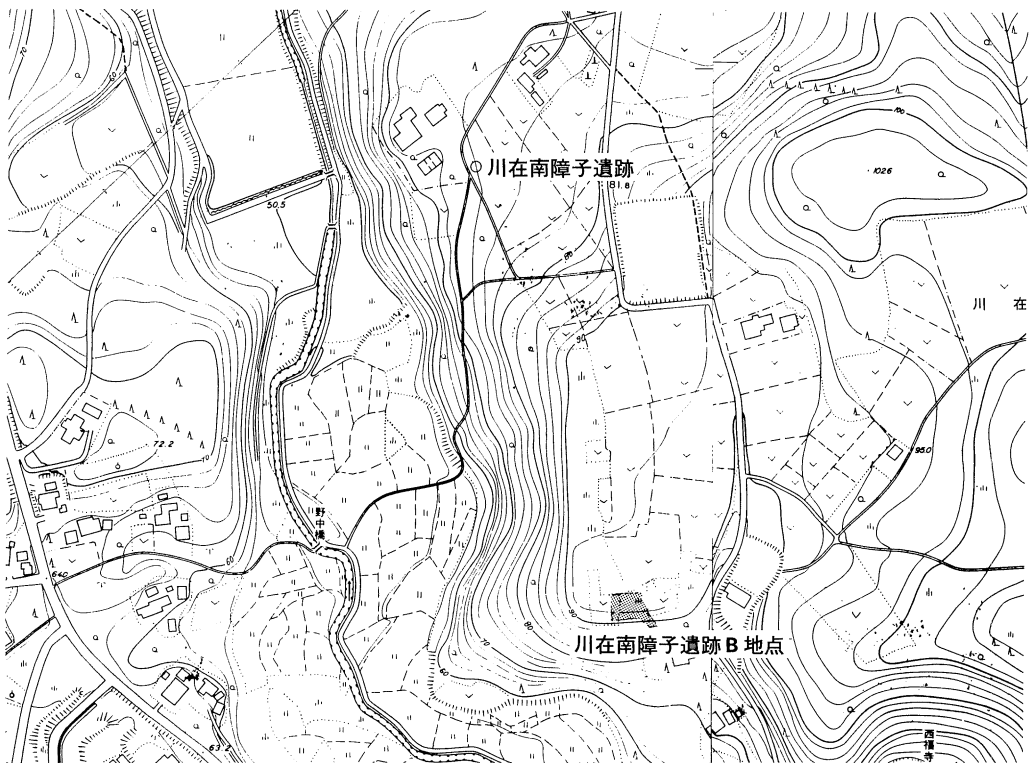
第3章 川在南障子遺跡B地点

1. 調査前の状況

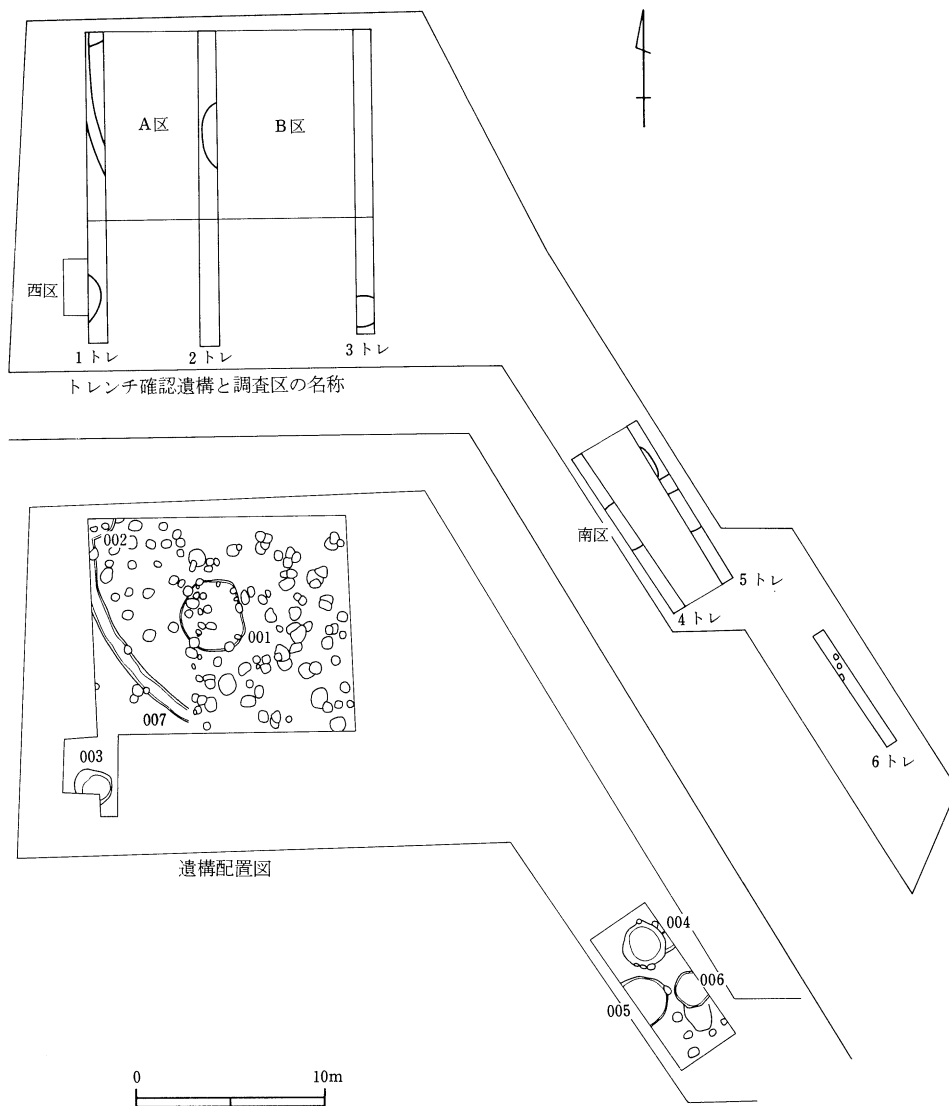
今回調査した地点は、前回の調査地点から約300m南東に位置する。既に触れた通り、周辺一帯には多くの縄文土器片が散在しており、集落の存在は十分に予想される場所であった。調査の対象となったのは、宅地の部分と、進入道路部分である。宅地部分は調査の直前までは耕作が行われており、土器片の散布がみられたが、進入道路部分は、雑草等が繁茂し、また斜面であったところからその状況については予想し難かった。また、進入路の西側には古墳が1基存在し、今回の調査対象範囲内に周溝が巡っている可能性もあった。

2. 調査の経過

調査は、宅地部分と進入路部分にそれぞれ3本のトレンチを設定して、遺構の分布状況を確認することから開始した。いずれのトレンチからも大量の土器片が出土し、1・2の両トレンチでは住居跡と考えられる落ち込みが確認された。また、1トレンチの南寄りの部分では、小竪穴と思われる、円形の落ち込みが確認された。3トレンチの南端で小竪穴が検出された。この小竪穴については、骨片の散布が認められたため、トレンチ設定範囲内で、床面まで掘り下げたが、まとまった骨の出土は確認されなかった。進入路側のトレンチでは、4トレンチおよ



第10図 川在南障子遺跡B地点および周辺の地形(1/5000)

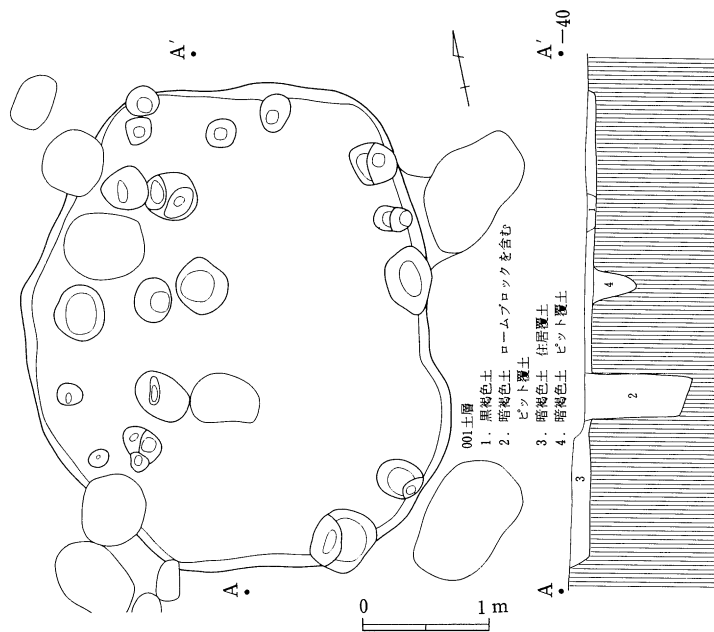


第11図 川在南障子遺跡B地点全体図(1/400)

び5トレンチで溝状の落ち込みが確認され、上述の周溝かと思われた。6トレンチでは、比較的大型の土器片が出土したが、小ピットが数個検出されたにとどまった。

この確認調査の結果をうけて、図示した部分を拡張して本調査を実施した。その結果、宅地部分では住居跡2軒、貯蔵穴と思われる小竪穴1基、ピット群、溝1条(007)が検出され、多くの土器が出土した。進入路部分では、当初、周溝とも思われた落ち込みが小竪穴であったことが判明し、この部分では3基が近接していることが明らかになった。同時にこれまで古墳と考えられていた、小高い盛土については塚の可能性も出てきたことになる。

以上が、調査の概要であり、個別の遺構および出土した遺物については、以下に記す通りである。



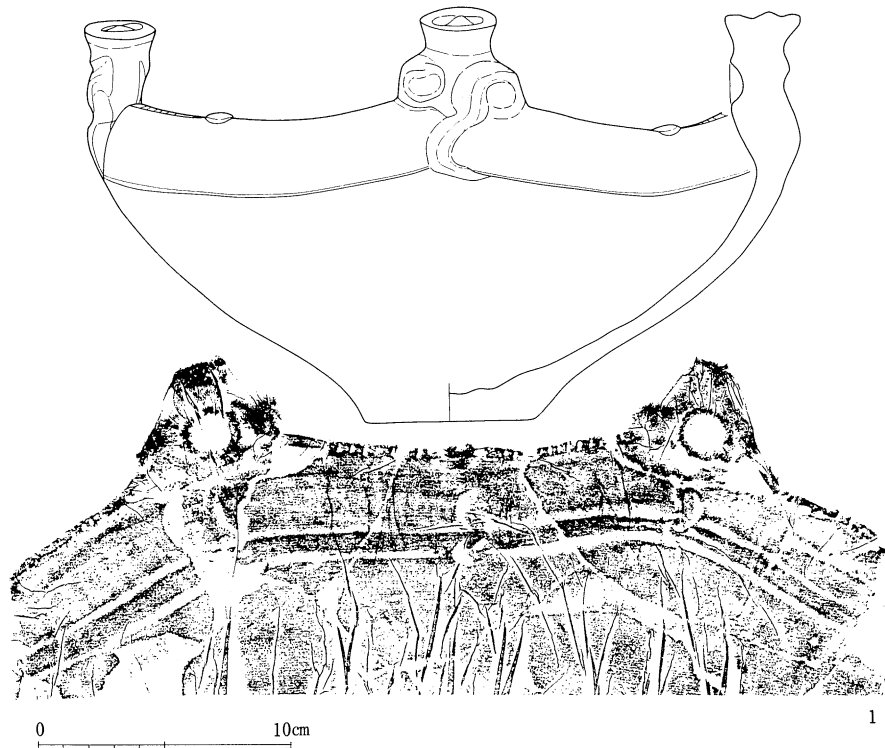
3. 遺構

001住居跡

宅地部分の調査区の中央やや西寄りの部分で検出された、平面形は歪んだ半月形で長軸3.8m、短軸3.2mを計る。炉は検出されなかった。柱穴については、周辺のピット群と錯綜している可能性もあり、確実にこの住居に伴うと言い切れるものは少ない(なお、ピット群については後述)。確認

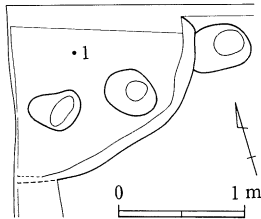
第12図 001住居跡実測図(1/60)

面からの掘り込みは、20cm前後で比較的浅い。この住居の覆土からは、図示したような遺物が出土している。今回の調査で得られた土器の中では唯一、ほぼ完形に復元しえた土器であり、この住居に伴うものと判断しておきたい。この浅鉢は口縁部に4個の突起を持ち、口唇部には



第13図 001住居跡出土遺物実測図(1/3)

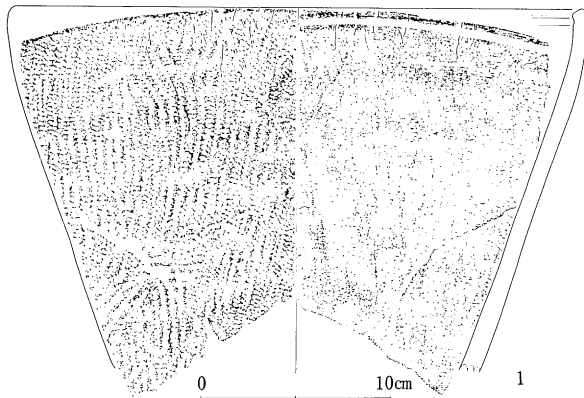
刻みが施され、突起との中間には小さい付文が施されている。内面は全面平滑になでつけられているが、外面は口縁部下4cm程の部分までは平滑であるが、それ以下は浅い段により区画され、調整はやや雑な感がある。また、内面には浅い2条の条線がめぐり、突起部、付文部の下には「ㄎ」の沈線文が付けられている。加曾利B2式以降の所産と考えられる。



第14図 002住居跡実測図(1/60)

002住居跡

調査区の、北西隅に一部のみが検出された住居跡である。001に比べ掘り込みはしっかりしており、確認面からの深さは、約40cmある。柱穴は2か所検出されたが、ピット群との関連の中でとらえる必要があることは、001と同様である。



第15図 002住居跡出土遺物実測図(1/4)

この住居からは、図示したような遺物が出土している。外面は縄文のみで、内面には口唇直下に一条の沈線がめぐり、加曾利B式の粗製の深鉢である。

003小竪穴

宅地部分の南西隅に位置する。径約1.5m、深さ約1.3mをはかる、平面形ほぼ円形のものである。断面形はややフラスコ形に近い形態を呈している。この遺構に伴うと言いつる遺物の出土はなかったが、覆土中から多くの土

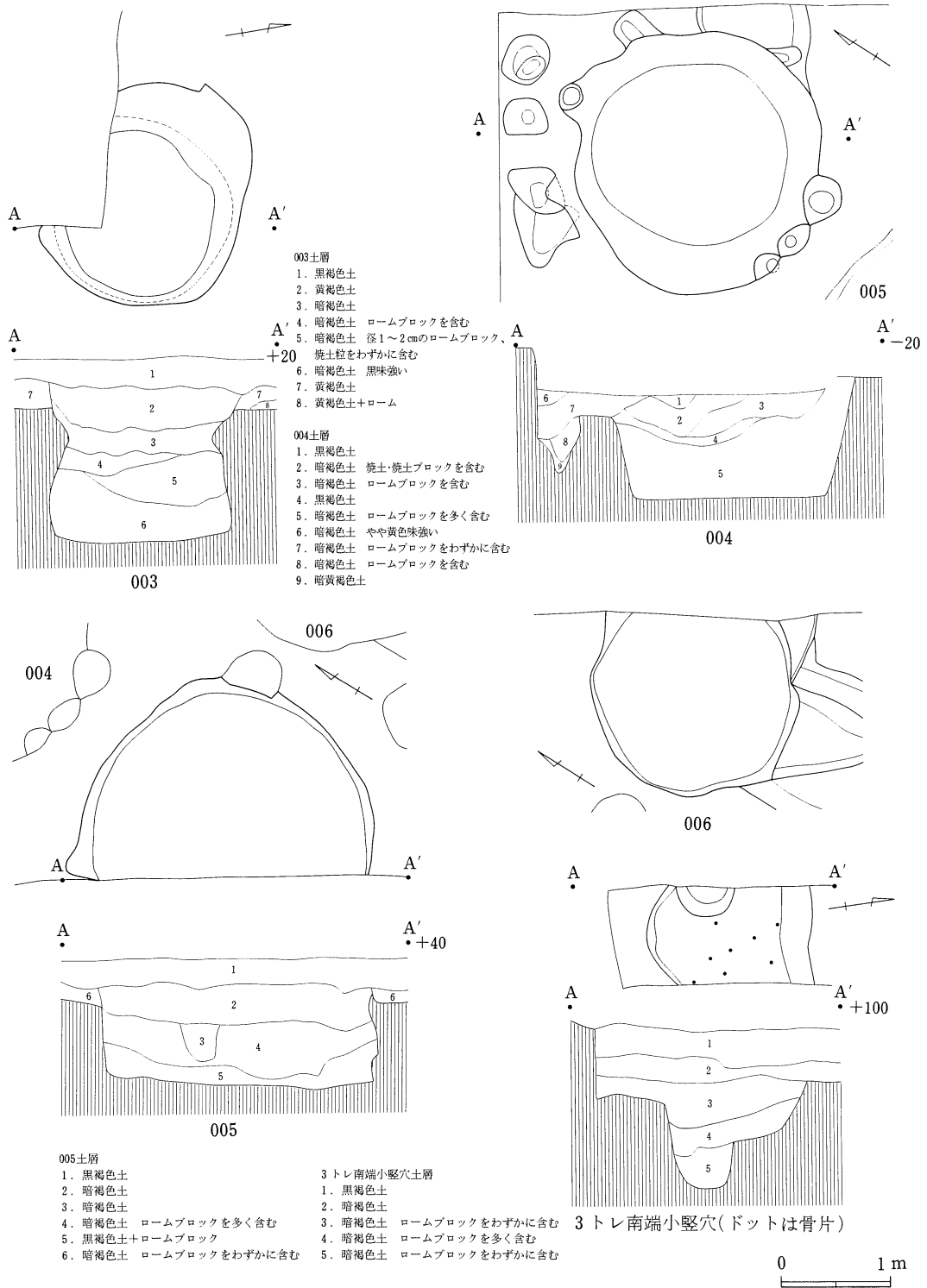
器片が得られている。これら、遺物については、まとめて後述する。

004小竪穴

進入路部分で検出されたものであり、完掘しえた唯一の小竪穴である。直径約2mの円形を呈する平面形を持ち、深さは約1.1mで壁の立ち上がりも比較的直で、全体的には、円筒形といえる。上述の003とは系統が異なる感がある。上端の南端においては、小ピットが3個並んだ形で検出されているが、この小竪穴に付随する可能性はあるが、断言しえない。覆土中層には炭化物、焼土が比較的多く含まれる層が一層認められた。埋没の途中で何らかの行為が周辺で行われたことを暗示するものであろうが、具体的行為は想起しがたい。覆土中からは多くの土器片が出土したが、明らかに本遺構に伴うと判断される遺物は皆無であった。

005小竪穴

004の西側に位置し、確認調査の際に存在が確認されていた遺構である。西側約1/2は調査範囲外であるが、直径約2.7mの円形を呈するものと考えられる。深さは約70cmで、壁の立ち



第16図 003~006および3トレ南端小竪穴実測図(1/60)

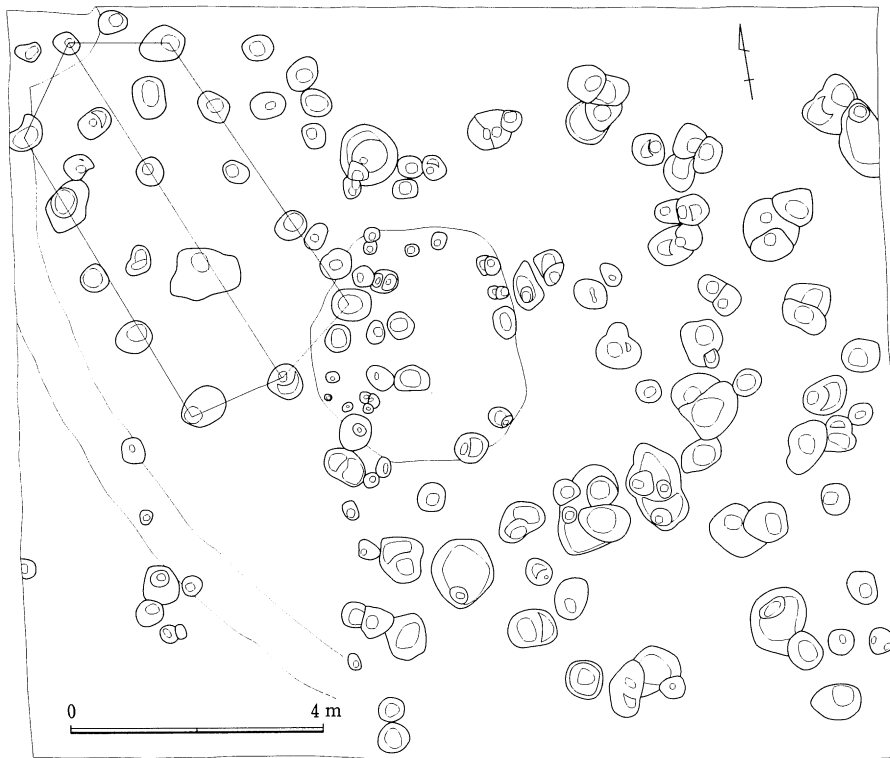
上がりは、003よりもさらに直である。この小竪穴も他と同様、明らかに共伴すると言い得る遺物の出土は認められなかった。

006小竪穴

004の東側に位置し、005同様、確認調査の際に存在が確認されていた遺構である。東側約1/4が調査範囲外に及んでいるが、直径約1.9mの円形を呈するものと考えられる。深さは約90cmで壁の立ち上がりも005同様である。なお、南側は浅い土坑状の落ち込みにより、壁の一部が削られていたが、この土坑状の遺構の性格は不明である。また、他の小竪穴同様、共伴する遺物の出土は認められなかった。

3 トレンチ検出の小竪穴

確認調査の際に3トレンチの南端部分で骨片の散布が認められた小竪穴を検出したことは前項で触れた通りであるが、ここで改めて報告しておく。直径約1.5m、深さ約50cmのほぼ円形を呈するもので、底面にはピットが一つ検出されている。骨片はいずれも底面から浮いた状態で検出された。わずかに骨と認められる程度の小片ばかりであり、種の同定等の分析は行っていない。



第17図 ピット群検出状況(1/120)

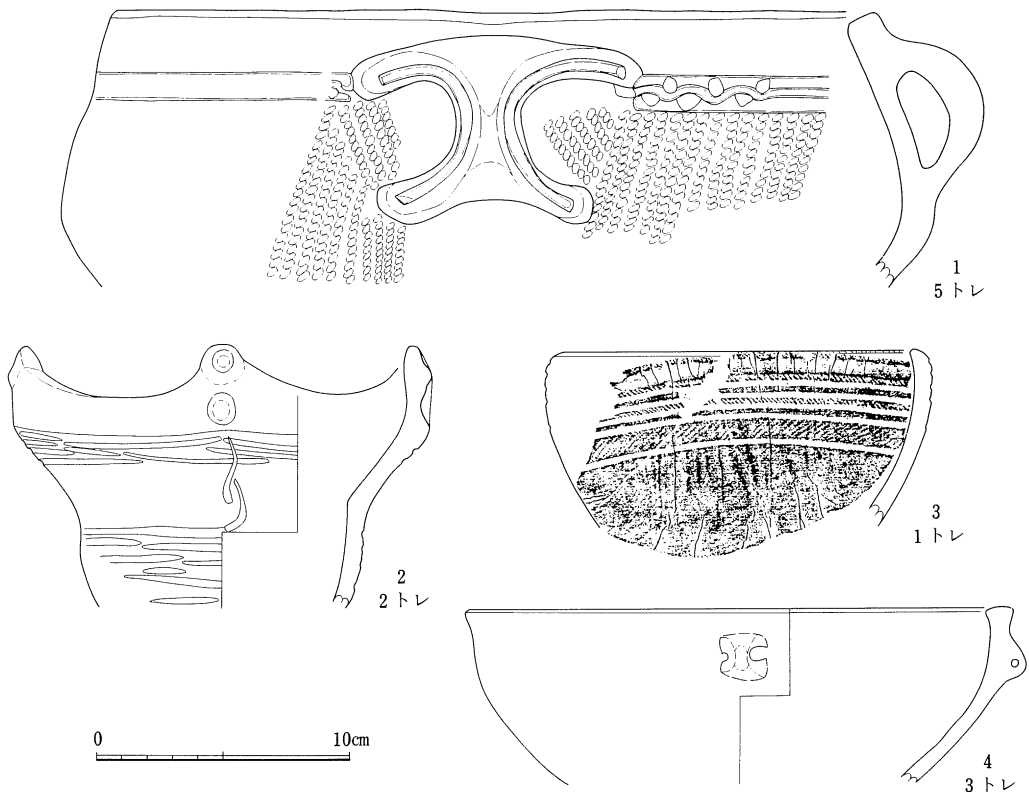
ピット群について

今回の調査では、上述のような遺構の他に前ページに図示したように多くのピットが検出された。しかし、調査面積が約170㎡と非常に限られているため、それらの有機的関係を抽出するのは非常に困難な状況であるといえる。そのなかにあつて、調査区北西で検出されている12個のピットについてはそれらが直線上にならぶことが図上で確認され、また、掘り込みの深さも80cm前後に収まっているので、掘立柱建物の柱の痕跡と判断したい。ほかにも001を四角く囲むようなピット列が認められるが、掘り込みの深さ等にばらつきが多いので、その可能性の指摘に止めておく。

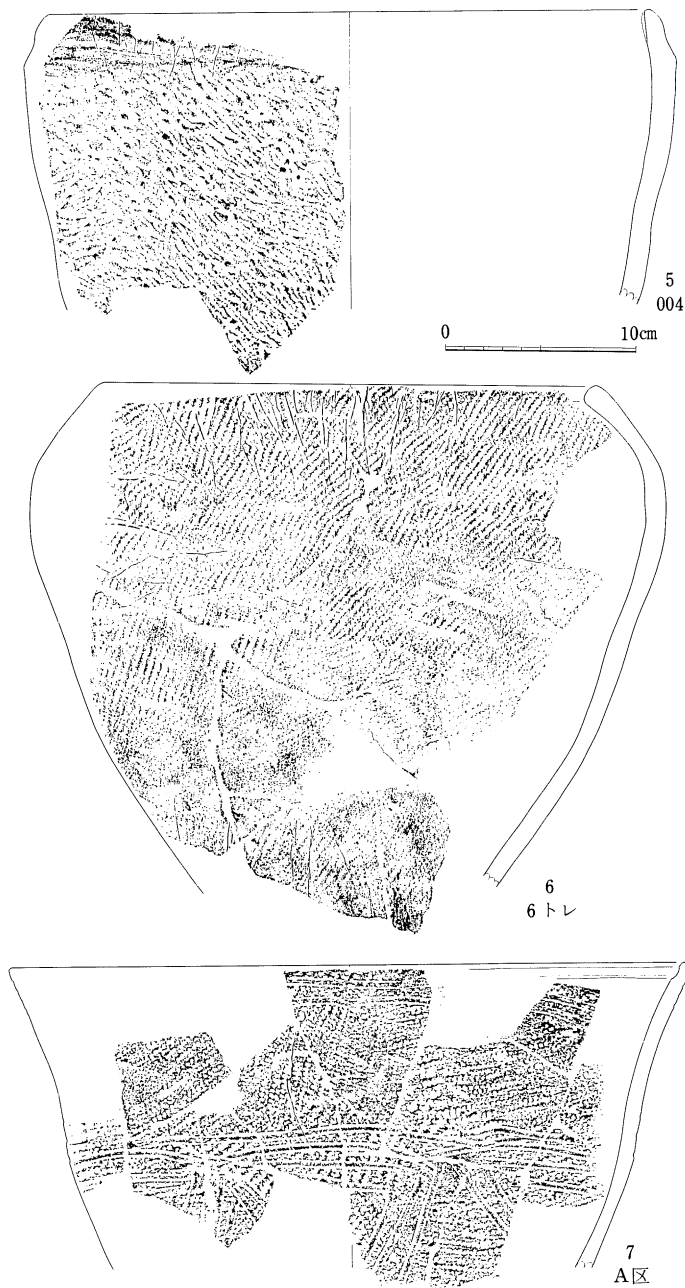
4. その他の土器

以下に図示するのは、今回の調査で得られた、多くの土器片の内、本遺跡の時期を考える上で重要と思われるものである。明らかに遺構に共伴する遺物の少ないことは妻々触れてきたところであるが、居住の連続、あるいは断絶を考えるには、本遺跡の場合共伴遺物のみでは不十分と考えられる。土器の通し番号の下に出土遺構または出土地区を表示してあるが、いずれも覆土中あるいは表土中からの出土であることを前もってお断りしておく。

1～8は比較的全体の形状がわかる程度に復元された土器である。1は加曾利E式の深鉢で



第18図 縄文土器実測図(1)(1/3)



第19図 縄文土器実測図(2)(1/4)

る土器と考えておきたい。また、31は曾利系の土器であろう。40～71は堀ノ内式を中心としたものである。61～63については沈線区画内に刺突を施し、称名寺式と共通する部分もあるが、小片であるためここでは堀ノ内式の中に収めておく。72以降は加曾利B式である。遺物の量からは、本遺跡の中心をなすものと考えられるものである。72～94は、比較的精製の深鉢である。なお、同型式の細分の軸とされている、口縁に三単位の突起を持つ精製の深鉢は検出されてい

ある。2は、加曾利B式系統の深鉢であるが、文様の特徴から東海地方の影響が考えられる。(菅谷通保氏御教示)3・4はいずれも加曾利B式の浅鉢である。4は内外面とも丁寧に整形されており、耳状の突起を持つ。5～8は比較的大型品であるが5・6は中期の所産と位置づけられる。7は胴部上半に竹管による太い沈線文様が施されている。内面口唇下には一条の沈線が巡らされる。8はやや内湾する口縁部の直下にキザミ、および口縁上を一部波状としそこにもキザミが施され、内面には一条の沈線が巡る。7は堀ノ内式に、8は加曾利B式に位置づけられる。9以降は破片資料である。9～39は中期の土器を中心にしてである。9～11は連続する刺突文をその特徴とし、阿玉台式に位置づけられる。12～39は加曾利E式に属する物を中心にしてあるが、30については胎土に長石を多く含み、他の土器とは一線を画す感がある。系統の異なる

ないことを明らかにしておきたい。72～94については、口縁が直線的に開く段階に位置づけられ、加曽利B 1式に属する物と考えられる。95～101、104、105は胴部が直線的な浅鉢である。いずれも、外面よりも内面に沈線文様が展開され、また突帯が巡っている。加曽利B 1式の典型的な浅鉢である。102、103および106～119は口縁が内湾する浅鉢である。107についてはこのまともりからは外れるかもしれない。102、103、106、108～111は平行する沈線内に縄文が施されるもの、112～116(114を除く)



第20図 縄文土器実測図(3)(1/4)

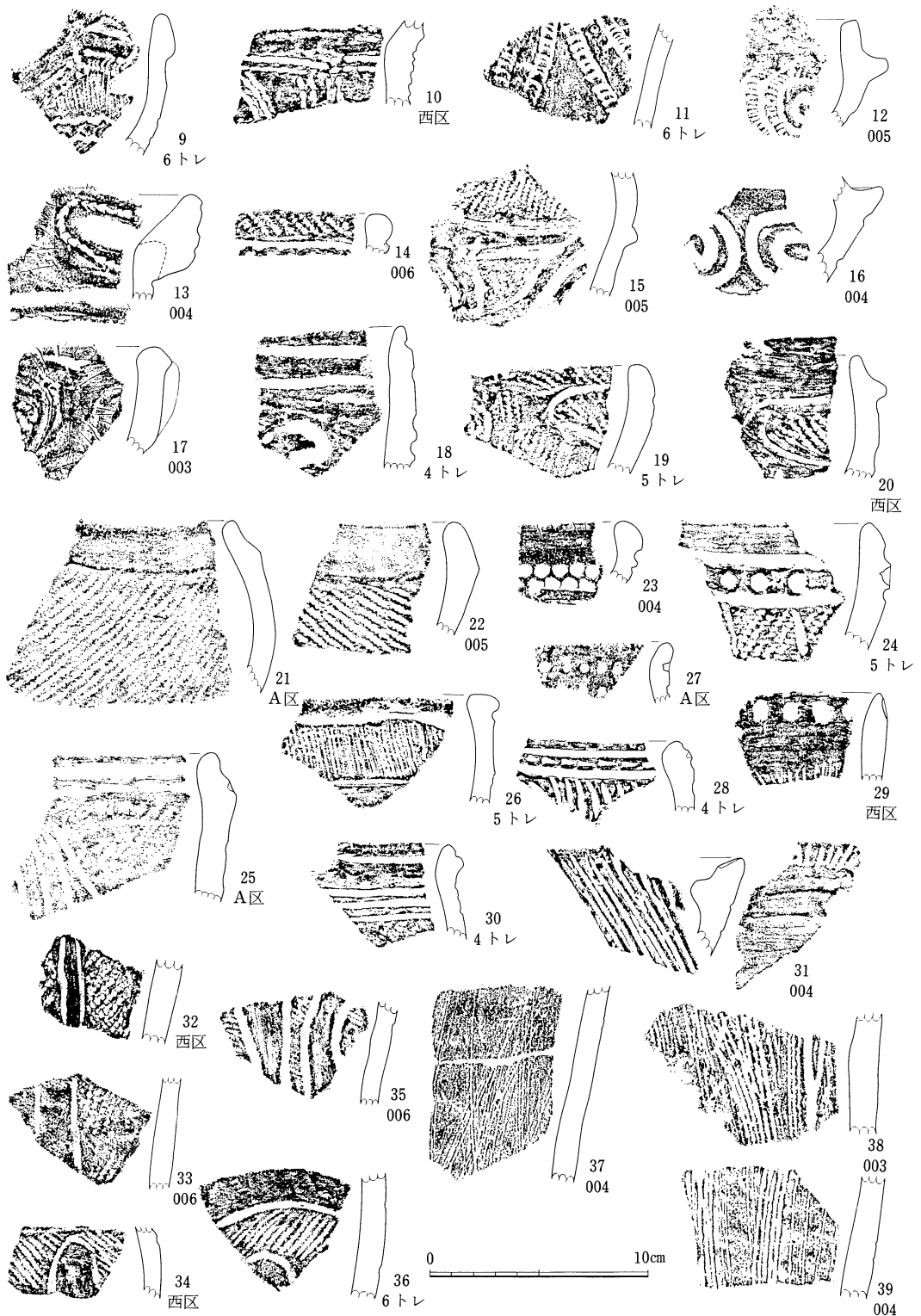
は口縁直下のやや太い沈線の下に刻みが施され、さらにその下の沈線を境に縄文が施されるものである。これら浅鉢は、何れも加曽利B 2式の中で捉えられるものと考えておきたい。120～144は、加曽利B 2式の精製の深鉢を中心としたものである。口縁下の平行沈線により区画された部分に「く」状の沈線文が施されているもの、または、沈線により半月状に区画された、無文部をもつものを中心としたものである。ただし、123・124については、やや趣を異にする。また、140～142は、おそらく浅鉢になるであろう資料であるが、いずれも外面口縁下の狭い沈線区画内に連続する刺突文を有するものである。この3点の位置づけについては、若干不安が残るが、この一群のなかに収めておく。144は水平な沈線上部に円形の刺突が加えられるもので、位置づけは不明であるが、暫くここに収めておく。145～148は波状口縁を有するものを集めた。149～154は口縁直下に円形刺突あるいはキザミを有しその下に沈線で区画された、やや幅の広い文様帯をもつものである。154は比較的小型の深鉢である。155については全体の文様構成は不明であるが、波状部の角が鋭角的であり、加曽利B 3式に属する可能性もあろう。156・157は弧状の沈線を連続させる、加曽利B 3式以降の典型的な文様である。158は底部のみの資料であるが、外面に櫛状施文具による文様を見せている。他の土器に比べ、器表面の調整等全体に丁寧な作りという印象を受ける。159～164は、注口土器のものと思われる資料を集めた。なお、注口部そのものの出土は認められていない。159と160は同一個体の可能性がある。いずれの注口土器も加曽利B式の範疇で捉えられるものと考えられる。165は内面にS字状の

沈線文をもつ突起部分の破片である。全体の器形は想起し難いが、特殊な器形をもつものではないかと考えられる。166～195は加曾利B 2式以降に出現する、条線文の土器を集めたものである。166～170は条線の幅も広く、深い感があり、条線の間隔も広い。171・174は条線の間隔が密なものである。172・177・184・190等は条線というよりも沈線文といった感じであるがこのまとまりの中で捉えておきたい。187はやや趣を異にするものである。191・195は同一個体と考えられるものである。条線部分の深さが非常に浅いものであり、口縁の形態も後出的な感がある。196以降には加曾利B式の粗製の深鉢をまとめてある。196～204は外面が縄文のみのものである。内面には沈線をもつものとそうでないものがある。205～208は縄文上に細い沈線を施すものである。209～213は格子状の沈線をもつものであるが、縄文を地文とするもの(209・210)と、地が無文のもの(210～213)がある。214～217は、口縁に平行する浅い沈線をもつものである。これらには内面に沈線は認められない。218～254はいわゆる紐線文の深鉢である。218～228は紐線文のみが付されるものであるが、内面の沈線はそれを欠くもの、1本のもの、2本のものである。229～237は地文の縄文に沈線などが加えられるものである。これらについてはいずれも内面に沈線をもっている。238～244は紐線が比較的太いかあるいは、装飾性の強いものである。断続的な沈線をほどこすもの、紐線を3条(239、241も同様か)、あるいは4条(242)付すものが認められる。これらについても、いずれも内面には幅の広い沈線が巡らされている。245～251は、いままで見てきた紐線文とは趣を異にするものである。口縁下に、あまり高さのない紐線を付すものである。249、250のように縦方向の付文がくわえられるものもある。252～254は口縁直下に比較の間隔の狭い刻みが施されるものでいずれも地文の縄文上に斜方向に沈線が加えられている。安行式と考えられる。255～273は深鉢の口縁部以外の部分の特徴的な物を集めたものである。なお、261は安行式であろう。274～285は安行式の精製土器を集めたものである。そのうち、274～278は、帯縄文を巡らすものであり、さらにその中でも274～278については縦方向に瘤状の突起を付している。これらの瘤上には刻み等の装飾は加えられておらず安行1式に位置づけられるものと考えられる。

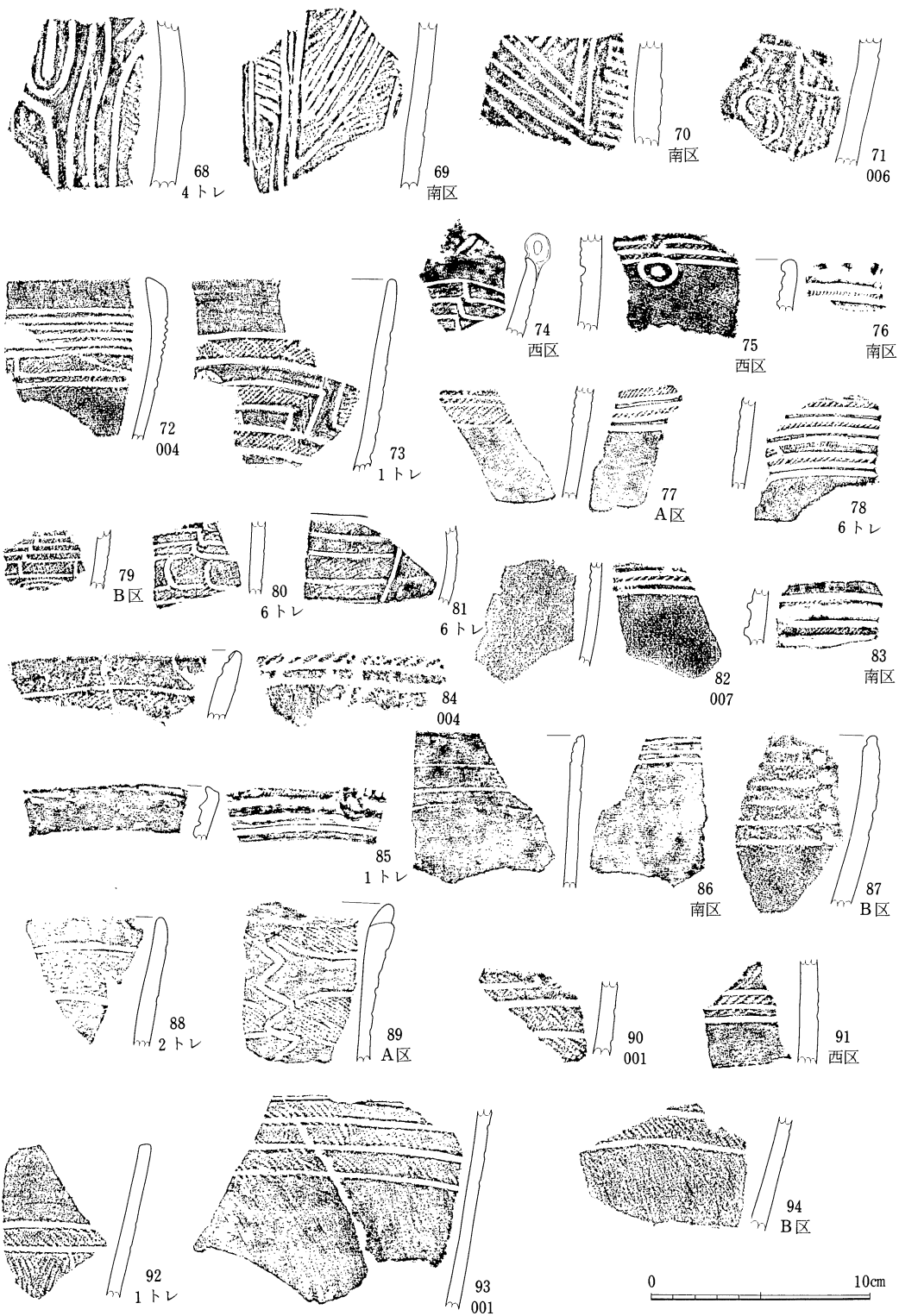
今回の調査において得られた土器資料は、以上の通りである。必ずしも連続する全型式が抽出されているわけではなく、若干の空白期間が存在した可能性を示すものの、相当期間にわたる居住が想起される。全体的には、さきにも触れた通り、加曾利B式の資料が最も豊富に得られていることは、この時期が本遺跡の中心となる時期であることをしめしていると考えられると同時に遺跡の広がり大きさも想像させるものであると言えよう。

5. 石器・土器片錘

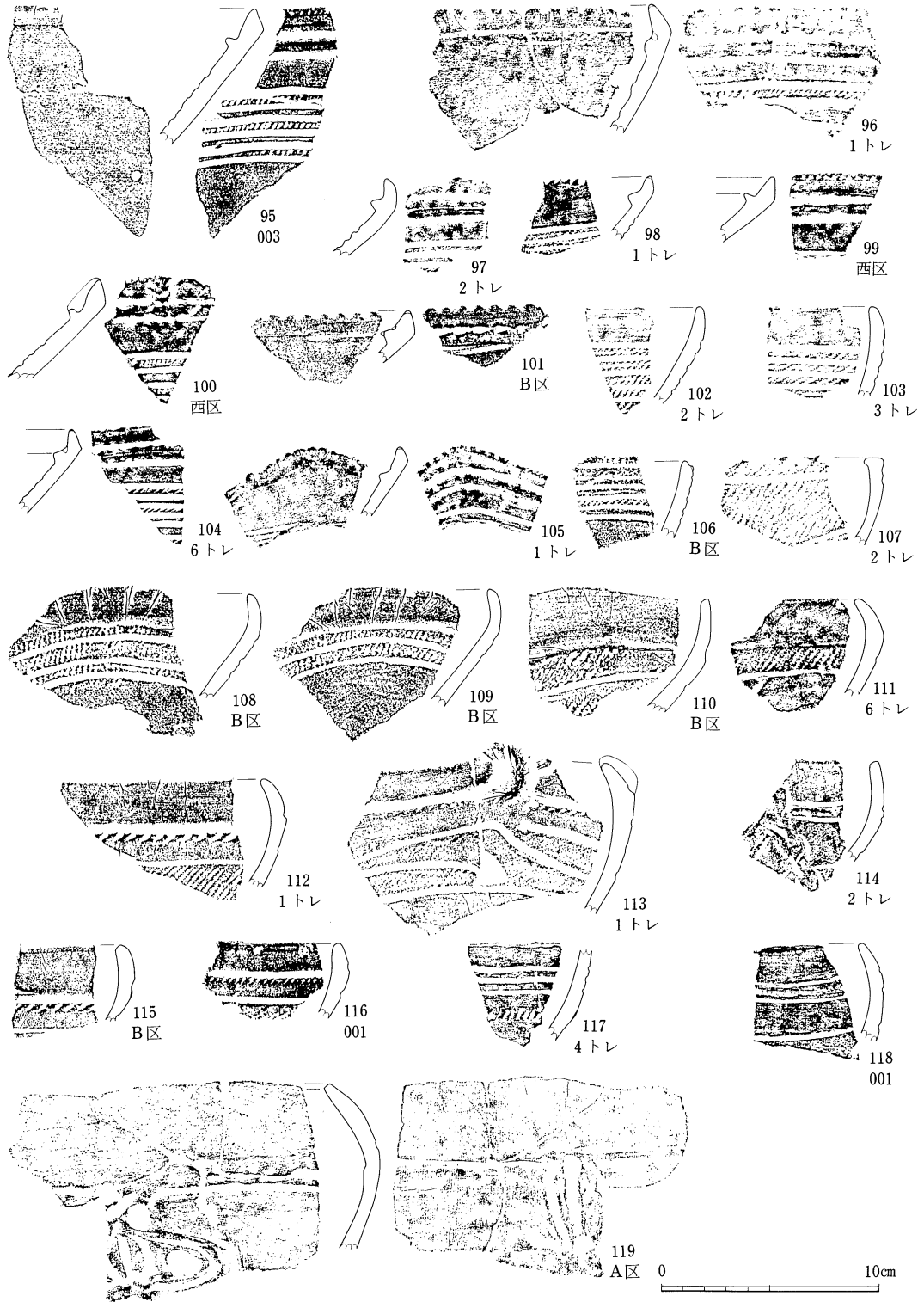
土器以外には、32図に示したような遺物が認められた。1・2はいずれも黒曜石製の石鏃である。図示した以外には、数片のチップが検出されたのみである。3は打製石斧の刃部側であ



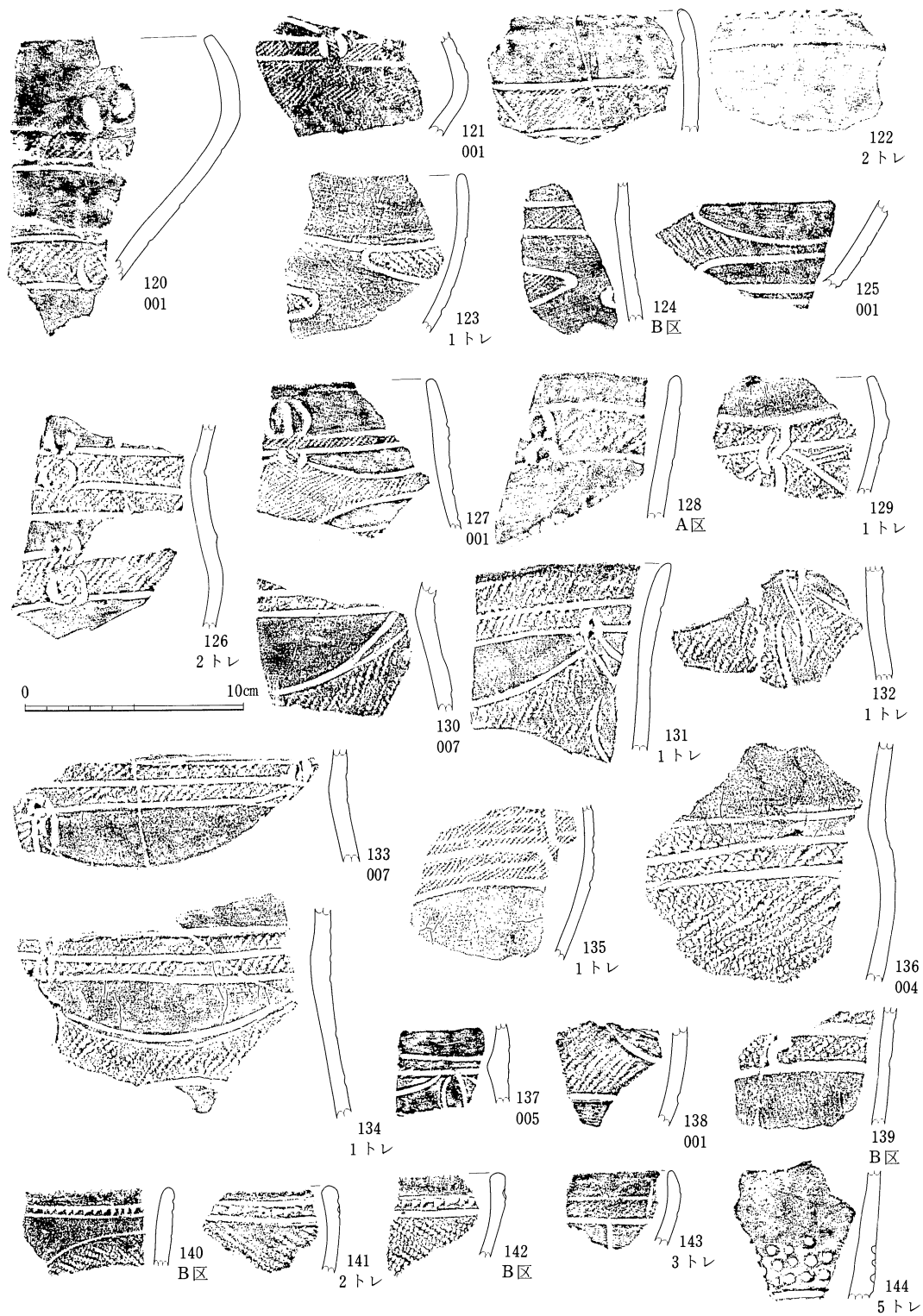
第21図 縄文土器実測図(4)(1/3)



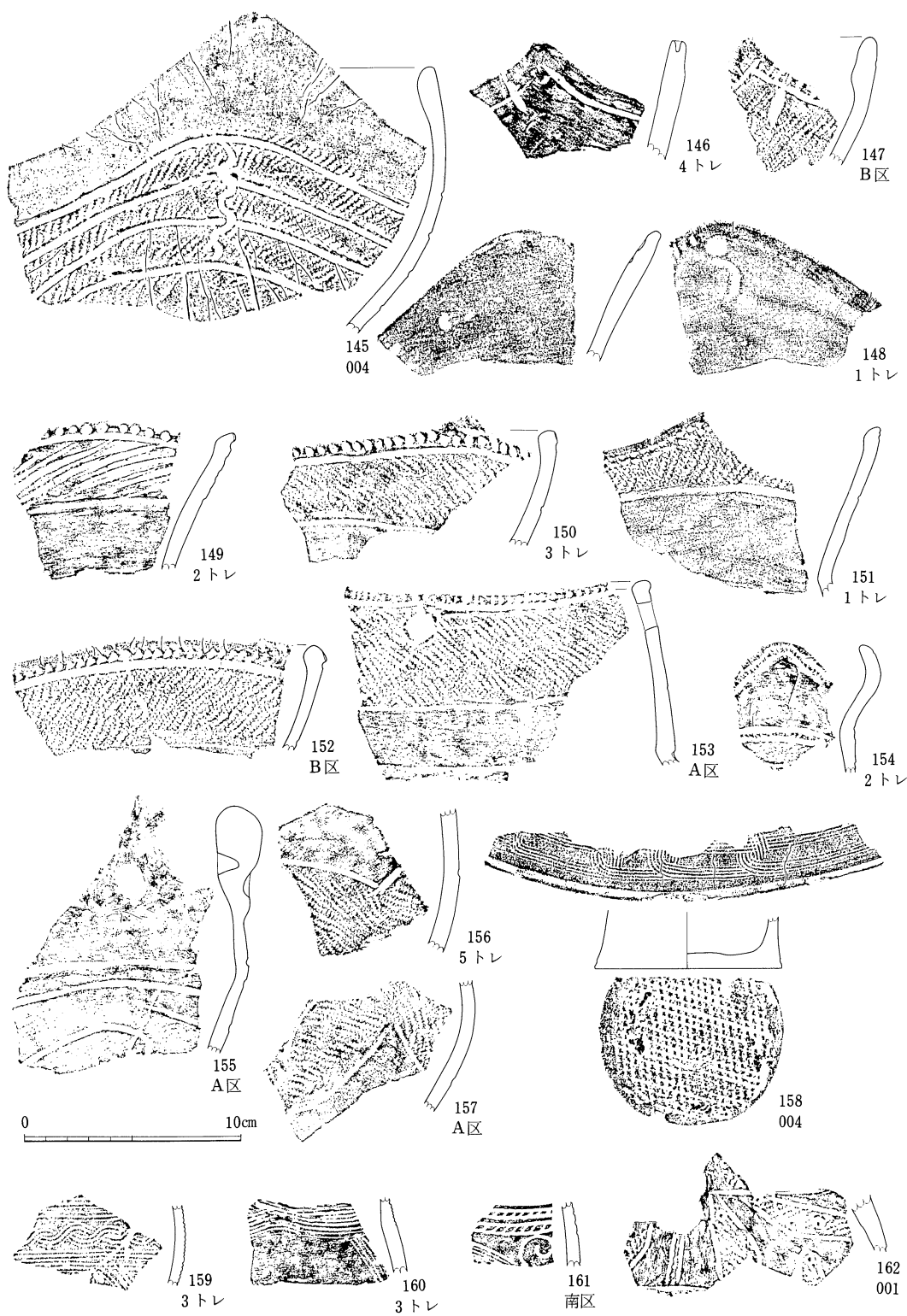
第23図 縄文土器実測図(6)(1/3)



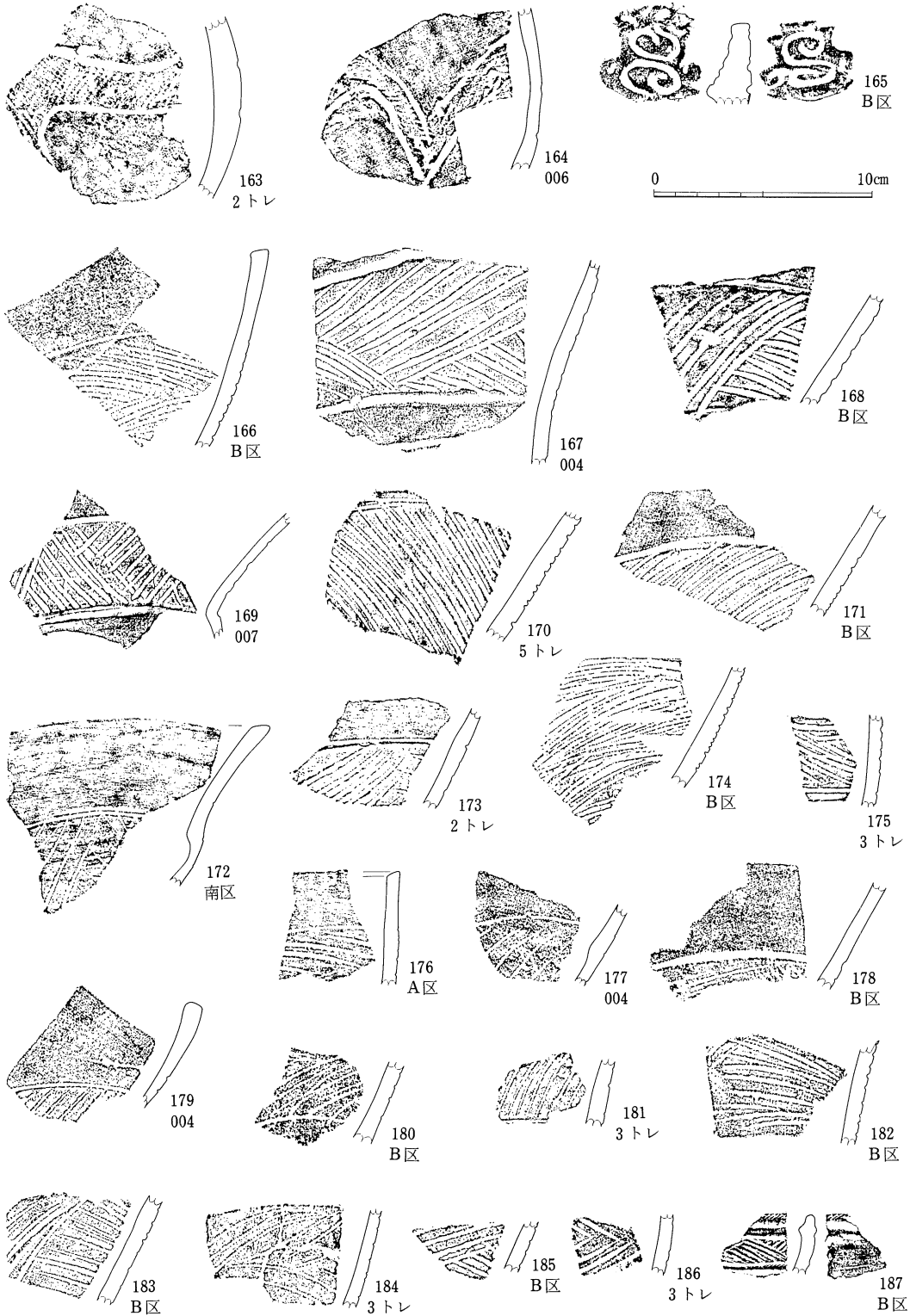
第24図 縄文土器実測図(7)(1/3)



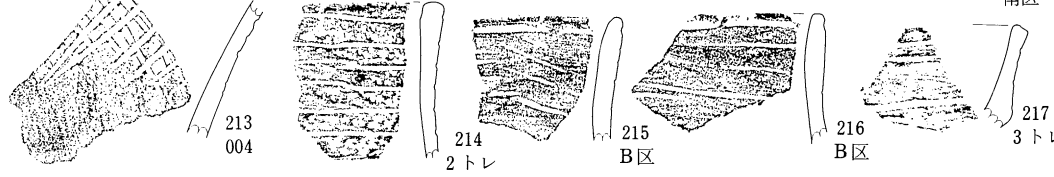
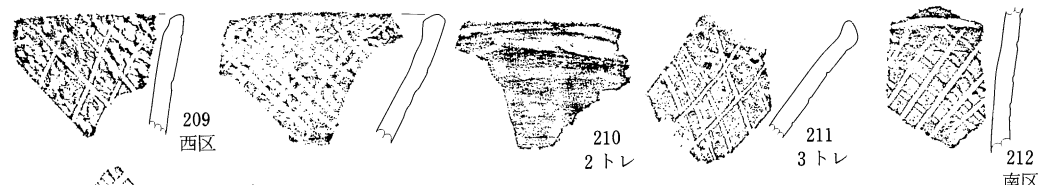
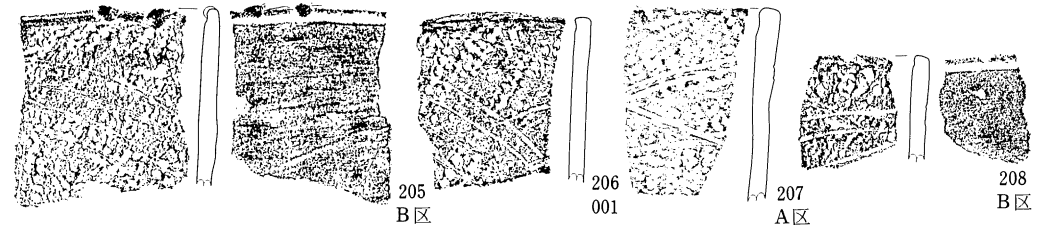
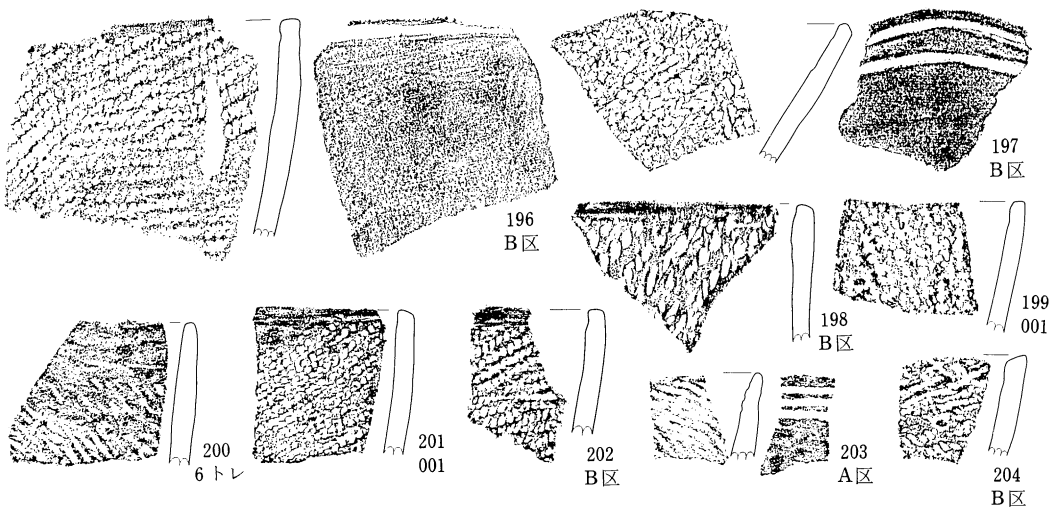
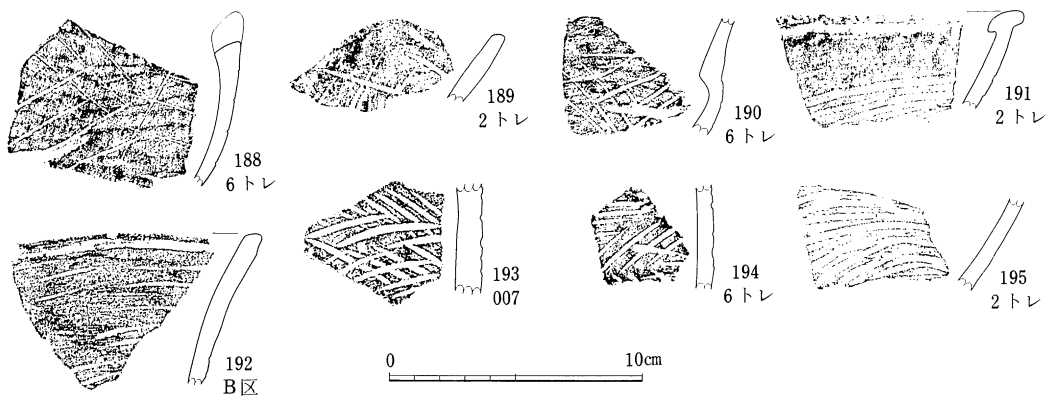
第25図 縄文土器実測図(8)(1/3)



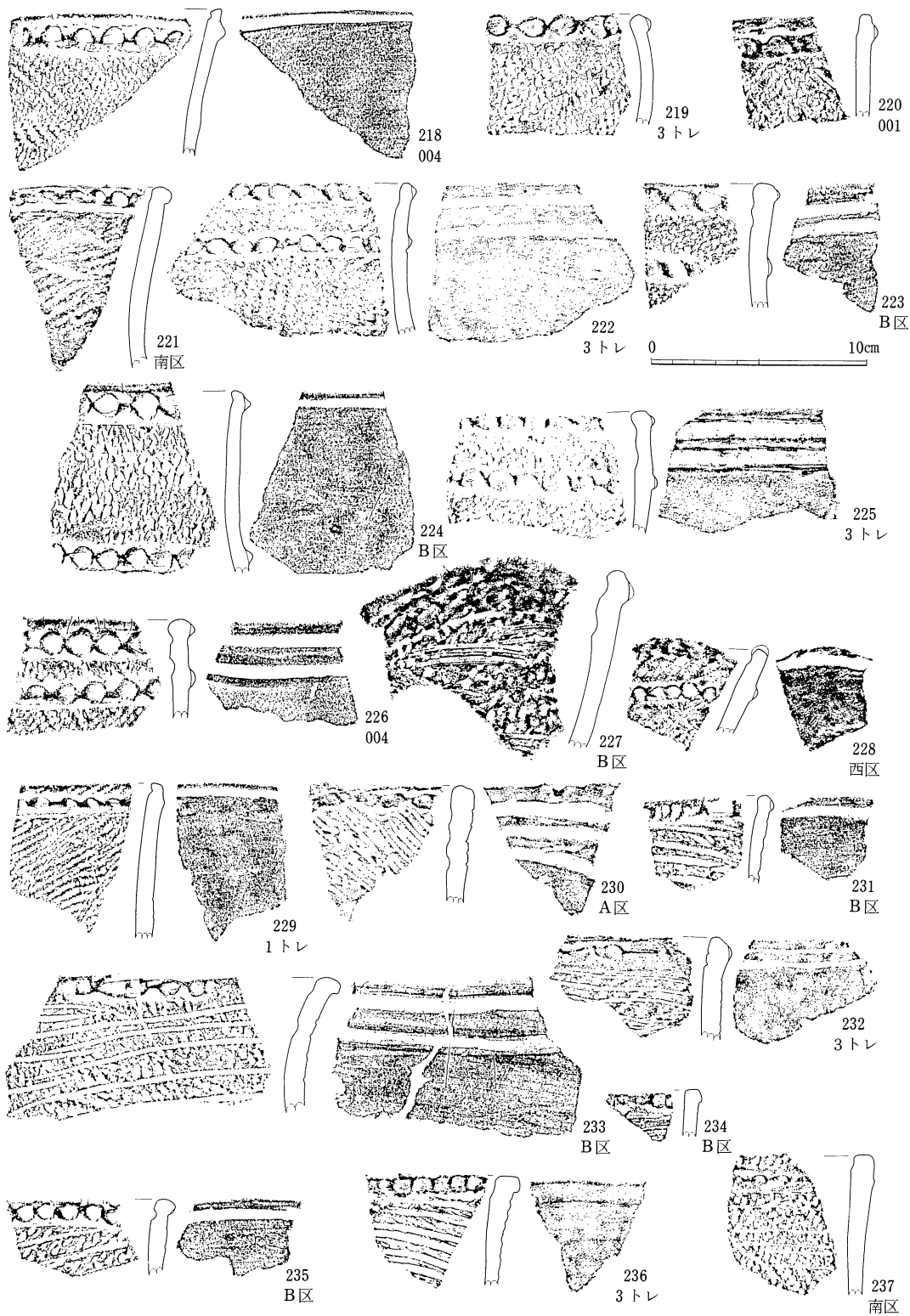
第26図 縄文土器実測図(9)(1/3)



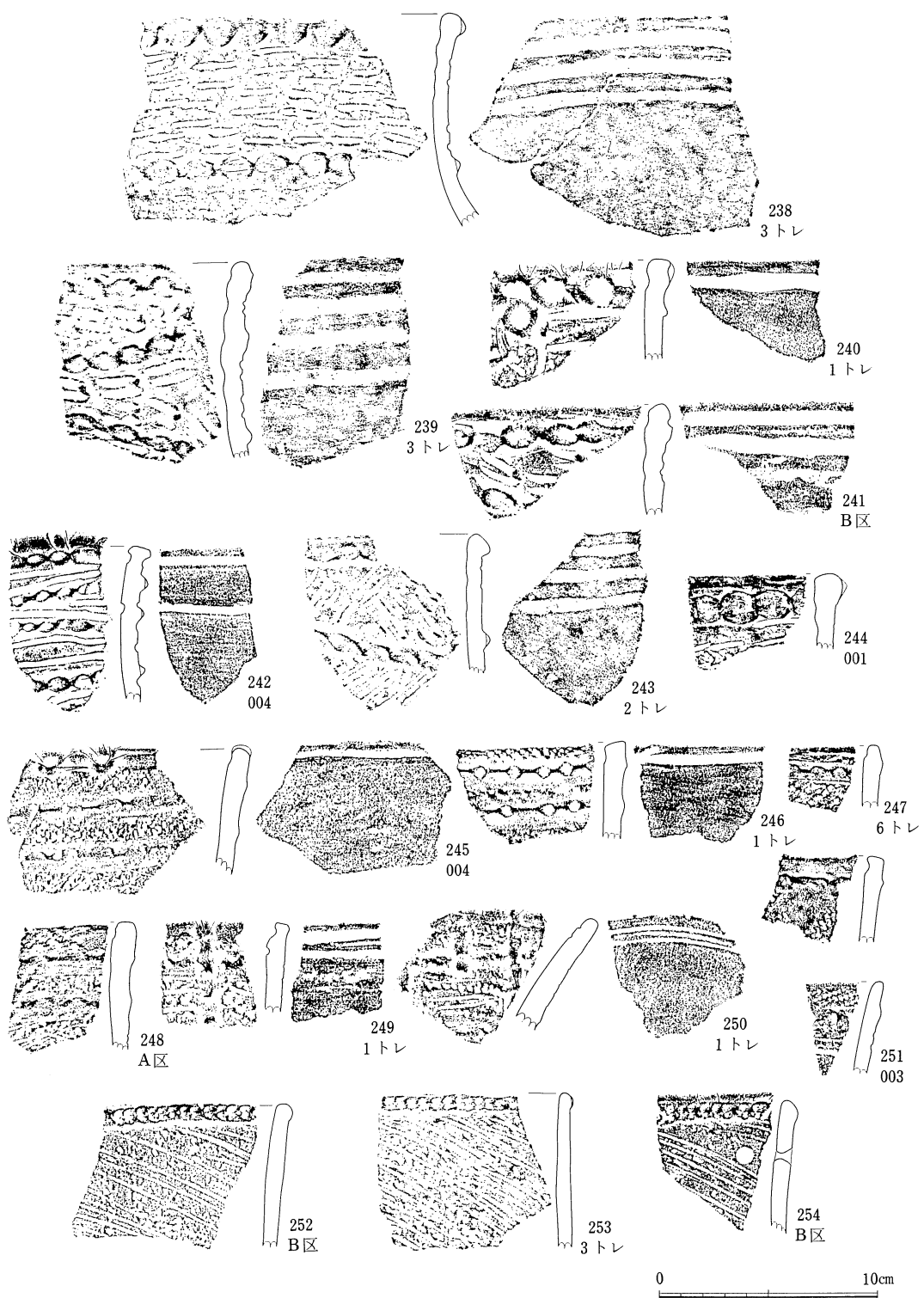
第27図 縄文土器実測図(10)(1/3)



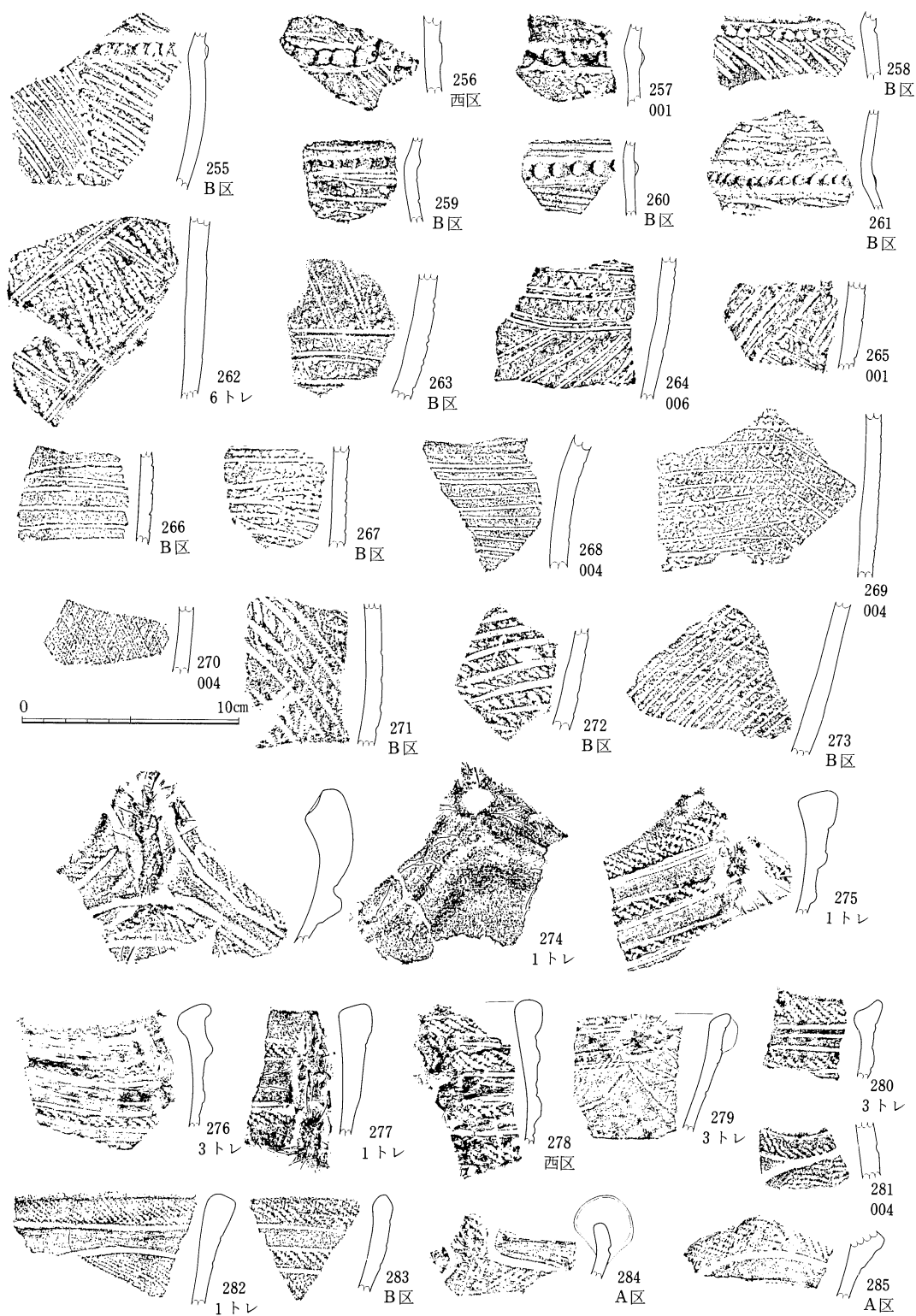
第28図 縄文土器実測図(11)(1/3)



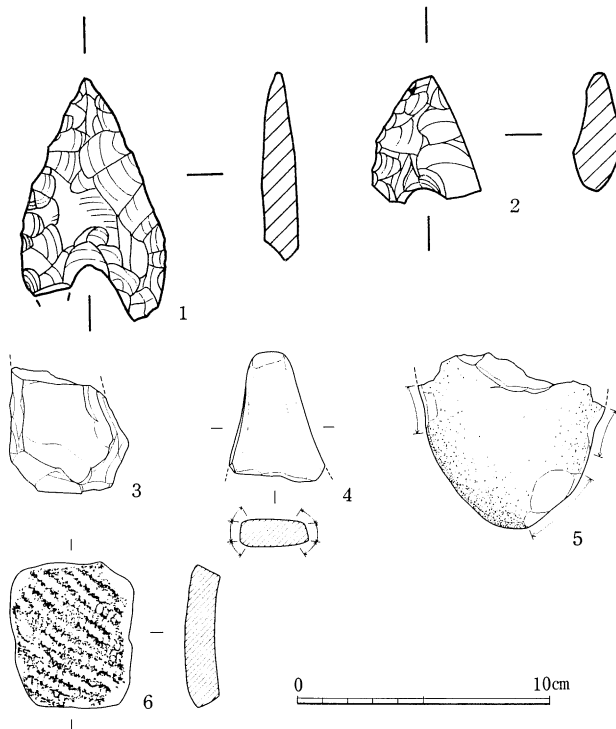
第29図 縄文土器実測図(12)(1/3)



第30図 縄文土器実測図(13)(1/3)



第31図 縄文土器実測図(14)(1/3)



第32図 石器・土器片錘実測図(石鏃は原寸、他は1/3) 6は土器片錘である。わずかに外

反する胴部破片を使用したものである。地文の縄文がみられるのみで、本来の帰属型式は不明である。側面の調整は明らかであり、上部に紐掛けの袂りが認められる。重量は43.7gである。側面調整した可能性のある土器片は、他にもわずかながら認められている。

6. 小結

限られた範囲の調査ではあったが、長期にわたり集落が営まれたことを示す、大量の土器が得られた。縄文時代中期中葉から後期後葉にかけて、おそらく、ほとんど断絶することのない生活の拠点であったと考えられる。その中でも、加曾利B式期がその最盛期であったと考えられる。また、市内ではいまだに検出例の少ない、掘立柱建物が検出されたことも特筆されることと言えよう。さらに、住居跡の外周に、小堅穴が密集していることが見て取れ、当時の集落景観を考える上でも、貴重な成果といえる。

市内における縄文時代の大規模な調査は、ほとんどが貝塚を伴うものであったのに対し、本遺跡および周辺においても貝塚の存在は確認されておらず、貝塚を伴わない大規模集落としての特異性、あるいは生業のありかたについても注目しておく必要がある。

る。他には良好な打製石斧の出土は認められなかった。4・5は何らかの使用痕をのこす石器である。4については、特に側面に平滑な部分が顕著で、図示した矢印の部分がその面にあたる。欠損している資料であり、本来の形状については不明である。5は敲打器と考えられる。側面にはやや凹状を呈する部分が3か所見られ、この部分は他に比べ表面が滑らかである。なお、4・5ともに自然礫をそのまま利用している可能性もある。一部に使用痕を残す石器は図示した以外にも数点認められている。

第4章 姉崎六孫王原遺跡E地区

1. 調査前の状況

本遺跡周辺においては、数次にわたる調査が実施されてきたことは、すでにふれた通りであり、ここでは重複を避け、今回の調査範囲内における状況についてのみ記しておく。今回の調査の対象となった部分は、かつては畑だったものが荒れて今日に至ったものであり、おそらく遺構には殆ど影響が及んでいないであろうという推測がなされていた。したがって、近接する毛尻遺跡や六孫王原遺跡A区に関連する集落が比較的良好な状態で検出される可能性が十分に予想される場所であった。

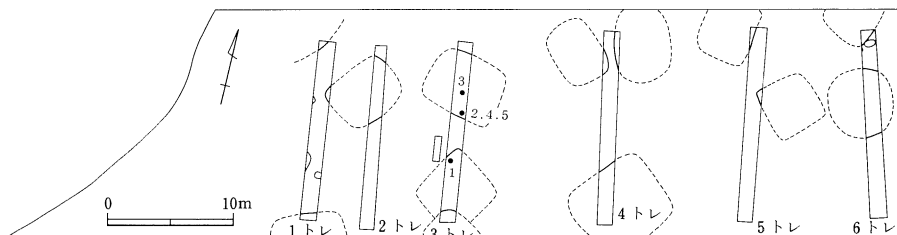
2. 調査の方法

調査は当初より、確認調査のみで終了する予定であり、遺構の分布状況を把握する事が目的であった。次頁に図示したように、東西に長い調査対象範囲に、南北方向に6本のトレンチを設定した。各トレンチともに遺構の存在を確認した時点で、それ以上の掘り下げは行っていない。また、トレンチの拡張という対応も行わなかった。なお、1か所のみ、サブトレンチを設定して対応した部分がある。

遺物に関しては、トレンチ掘削中、あるいは清掃中、精査中に出土したものについては持ち



第33図 姉崎六孫王原遺跡E地区および周辺の地形(1/5000)



第34図 姉崎六孫王原遺跡E地区全体図(1/600)(ドットは掲載遺物出土地点)

帰ってきた。精査中に出土した遺物に関しては、全体図中にプロットするという形での対応をしてある。

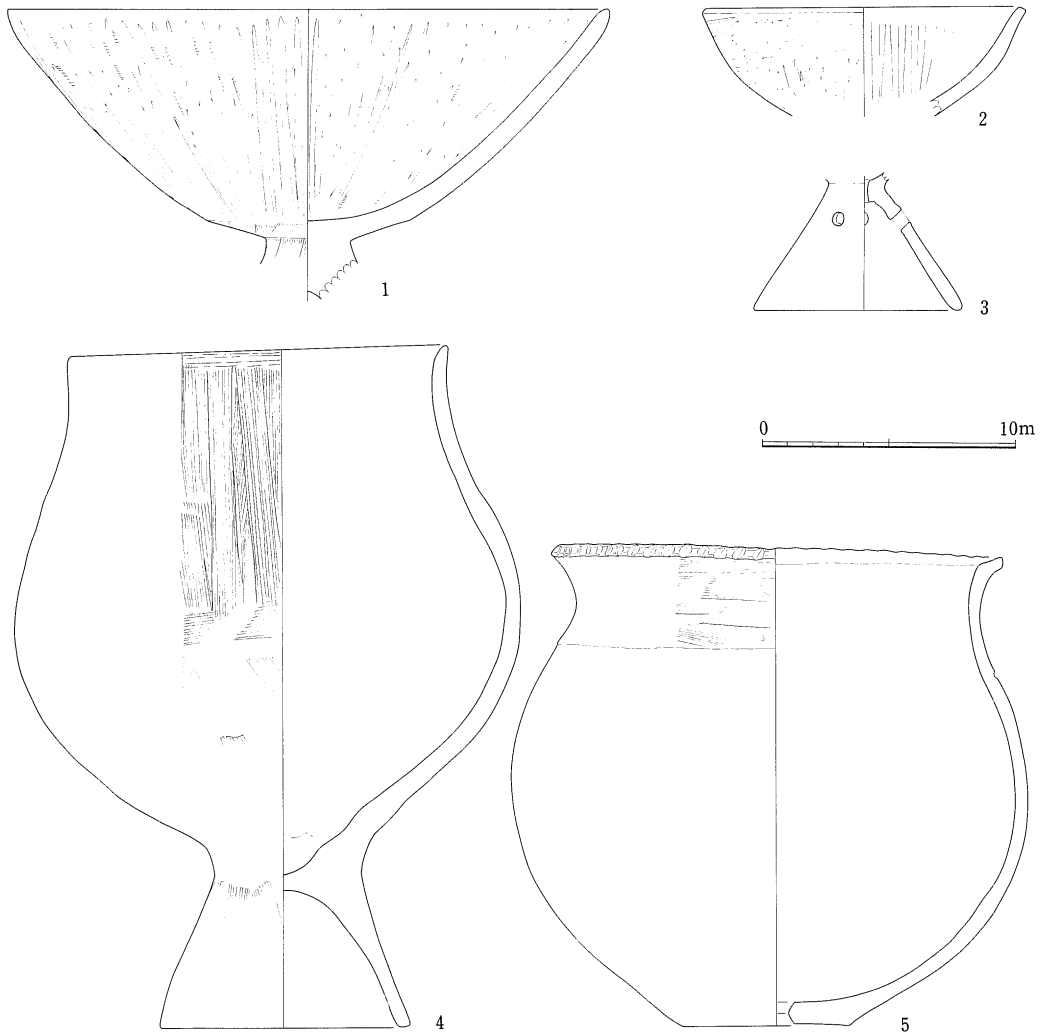
3. 確認した遺構と出土遺物

上図に示したように、各トレンチで2～3軒ずつの住居跡が確認された。全体では、確認された住居跡の数は、14軒に及ぶ。かなり密集して住居跡が営まれていることが予想される結果となった。なお、このうち、3トレンチ中程で確認された1軒については、トレンチの壁面の精査に際して、硬化面が確認され、さらに同トレンチの西側にサブトレンチを設定し、遺構の確認面より上位に床の張られていることが確認されたものである。(図版6参照)

確認された各住居跡は平面形としては小判形あるいは隅円方形を呈するものと考えられる。各住居の規模に関しては、トレンチ調査という制約もあって、ほとんど不明といわざるを得ない状況である。また、3および4トレンチで確認された住居に関しては、焼土や炭化物の散布が多く認められ、いずれも焼失住居であるかもしれない。

遺物については、3トレンチで良好な資料が得られた以外は、ほとんどが小片の資料であった。したがって、ここでは同トレンチより出土した資料を掲載するに止めておきたい。なお、出土地点については、全体図の中に示しておいた。

1は、高坏の受部である。脚台部を欠いている。内外面ともにハケののちミガキを施しており、ハケメはごくわずかな部分においてのみ見出せる。口径は23.8cmである。2は坏である。底部を欠く。口径は12.5cmで、外面上半は横方向のミガキが、下半は縦方向のミガキが認められる。また、内面にも縦方向の暗文風のミガキが見られる。3は器台の脚部である。底径は8.4cm、透かし孔は3か所である。4は台付甕である。ほぼ完形に復元された。甕部分はやや縦長の形態であり、口径14.8cm、甕部高20.0cm、台部高7.0cm、台接地部径10.0cmである。胴部外面は、上半には浅い縦方向のハケが施されている。台部の内面は粗い横方向のケズリである。5は底部に焼成前の穿孔がなされている甕である。ほぼ完形に復元された。4に比べて胴が張る形態である。口径17.8cm、底径7.6cm、器高19.0cmである。頸部と胴部の境にわずかに輪積み痕を残し、頸部には横方向のハケが施されておりそれ以外の部分は丁寧にナデられている。底部の穿孔は上下両方向からなされたと考えられ、孔の中央部分で最も狭くなっている。



第35図 姉崎六孫王原遺跡E地区出土遺物実測図(1/3)

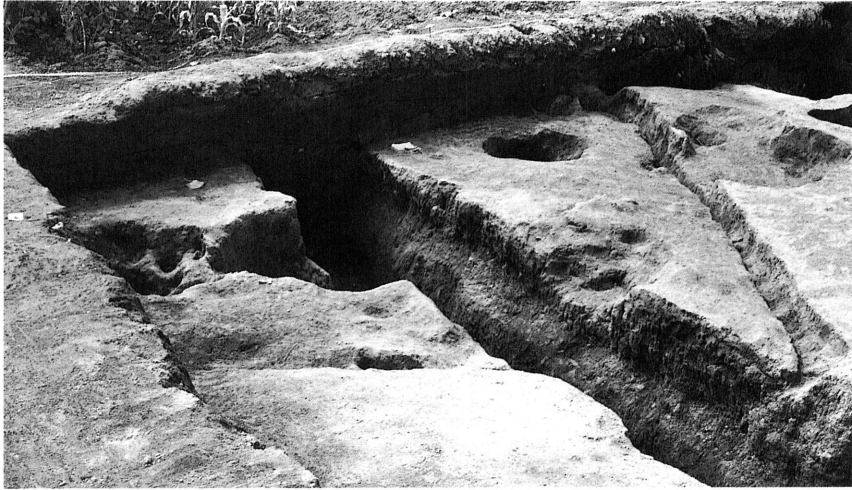
4. 小結

限られた範囲の調査であったが、弥生時代から古墳時代にかけての集落が比較的密集した状態で、しかも良好な状態で残されていることが確認された。北側に隣接する毛尻遺跡、六孫王原遺跡A地区と一続きの集落と捉えることが可能と思われる。さらに、南側に隣接する同遺跡B地区の集落へと連続していくことが明らかになった。したがって、これまでの調査によりすでに明らかになっていることではあるが、本地区を含めた北側は居住区、南側のD地区を中心とした地区は墓域と漠然と捉えることができるのではないかと考えられる。なお、六孫王原遺跡の各地区における調査の成果間の詳細の検討、さらには姉崎古墳群全体を見渡した中での関連性については後日の課題として設定しておきたい。

山倉前畑遺跡 図版 1



遺跡近景
(北東から)



001住居跡全景
(東から)



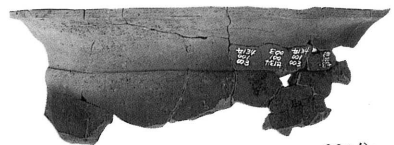
001住居跡
甕出土状況

出土遺物



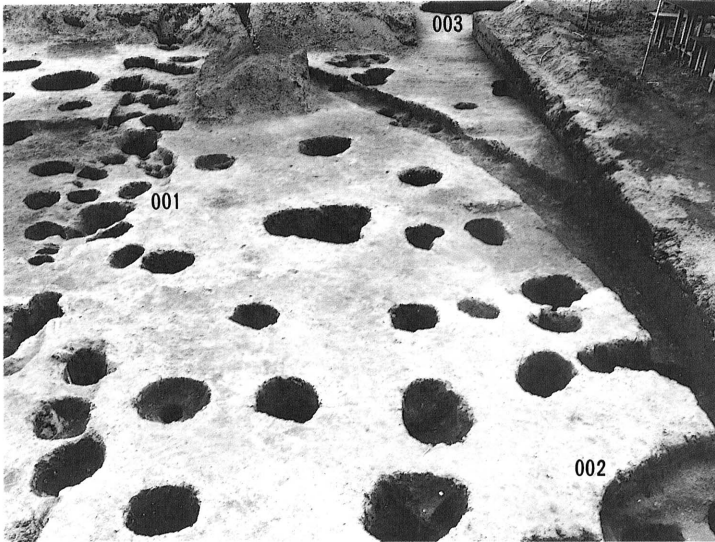
001住-2

9図-5



001住-1

川在南障子遺跡B地点 図版2



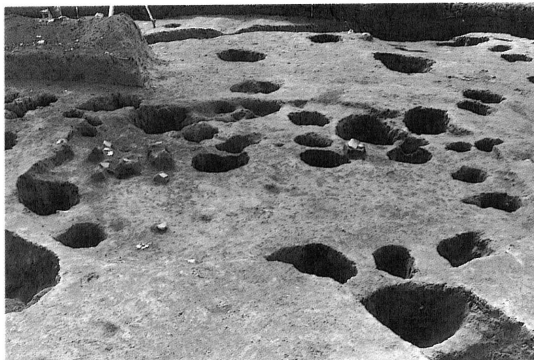
本調査部分西半(A区)全景
(北から)



本調査部分東半(B区)全景
(南から)



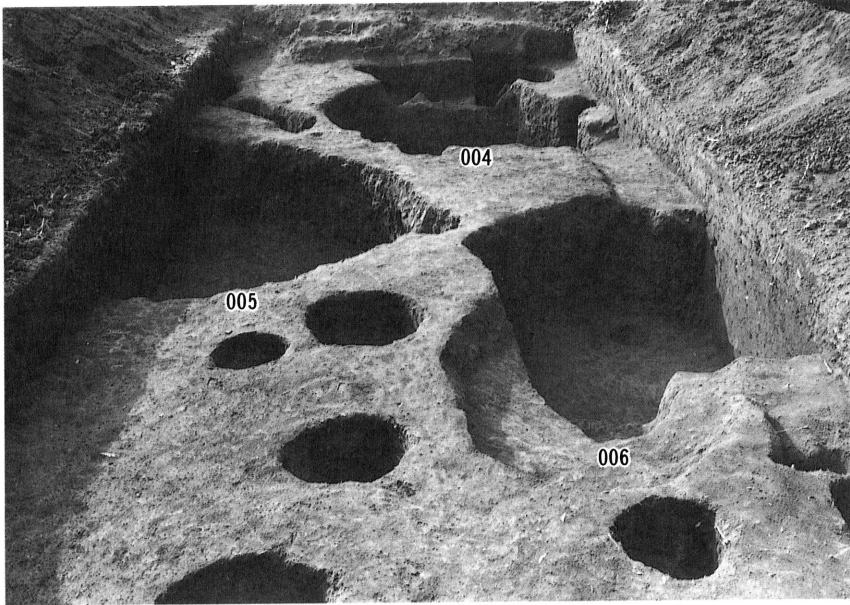
003小竪穴全景(東から)



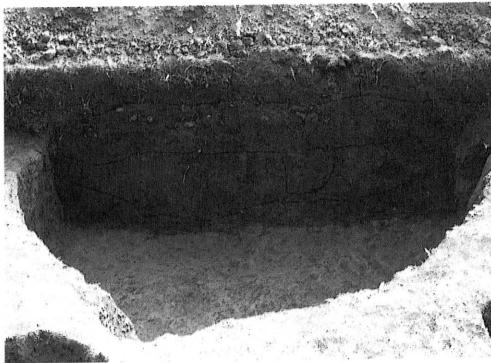
001住居跡全景(東から)



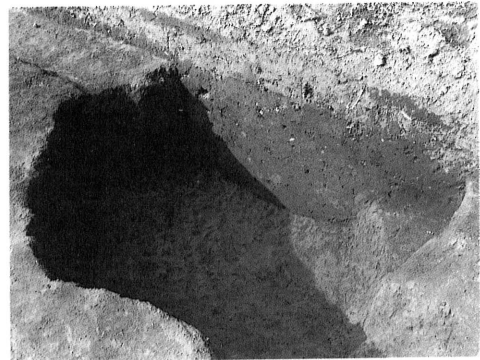
002住居跡全景(南東から)



南区全景
(南から)



005小竪穴全景(東から)



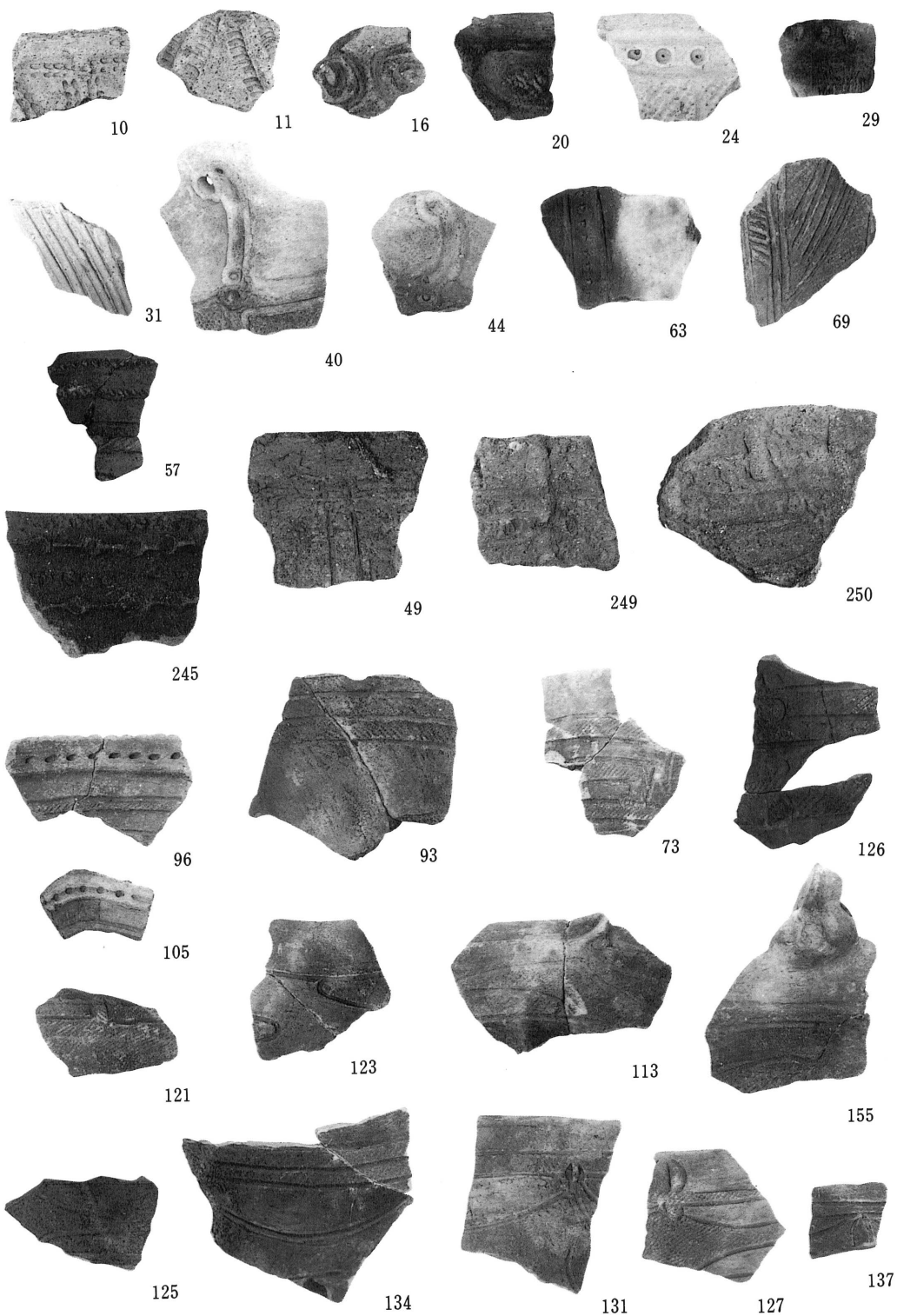
006小竪穴全景(西から)



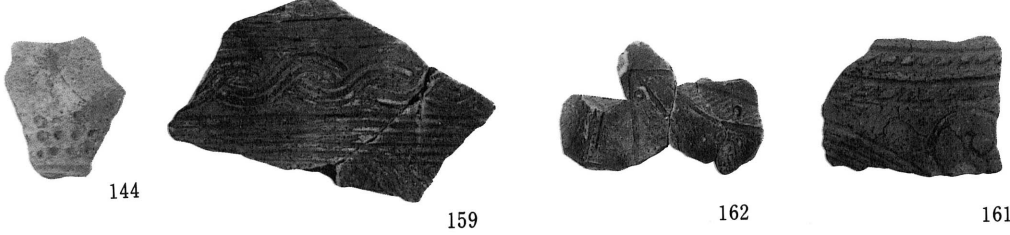
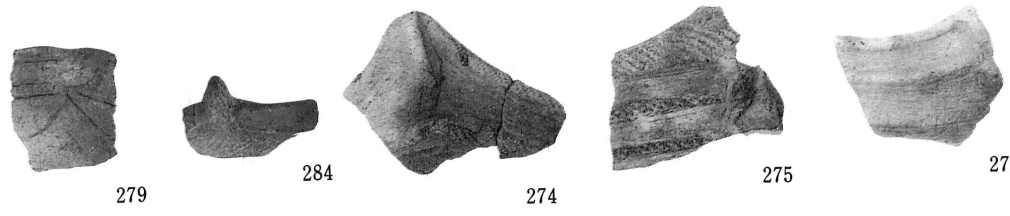
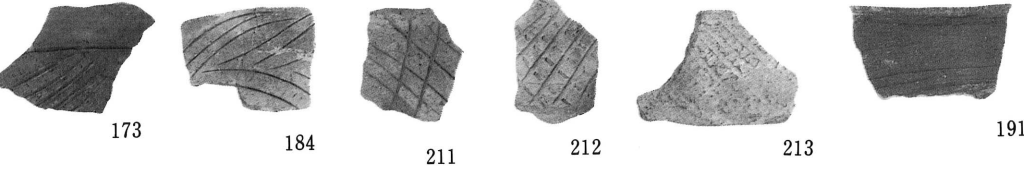
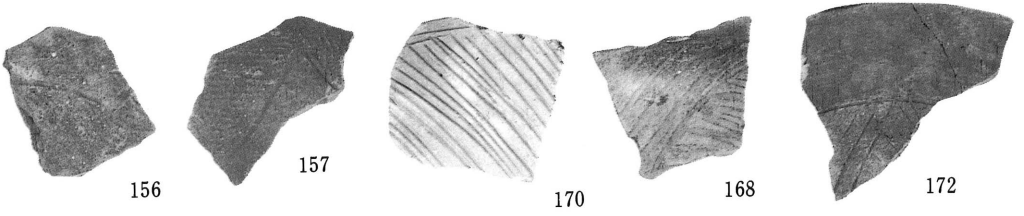
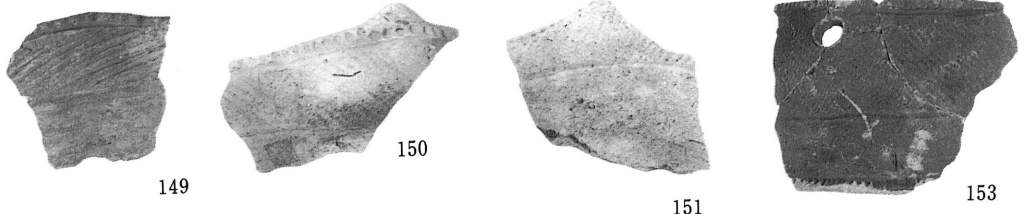
004小竪穴全景(北から)

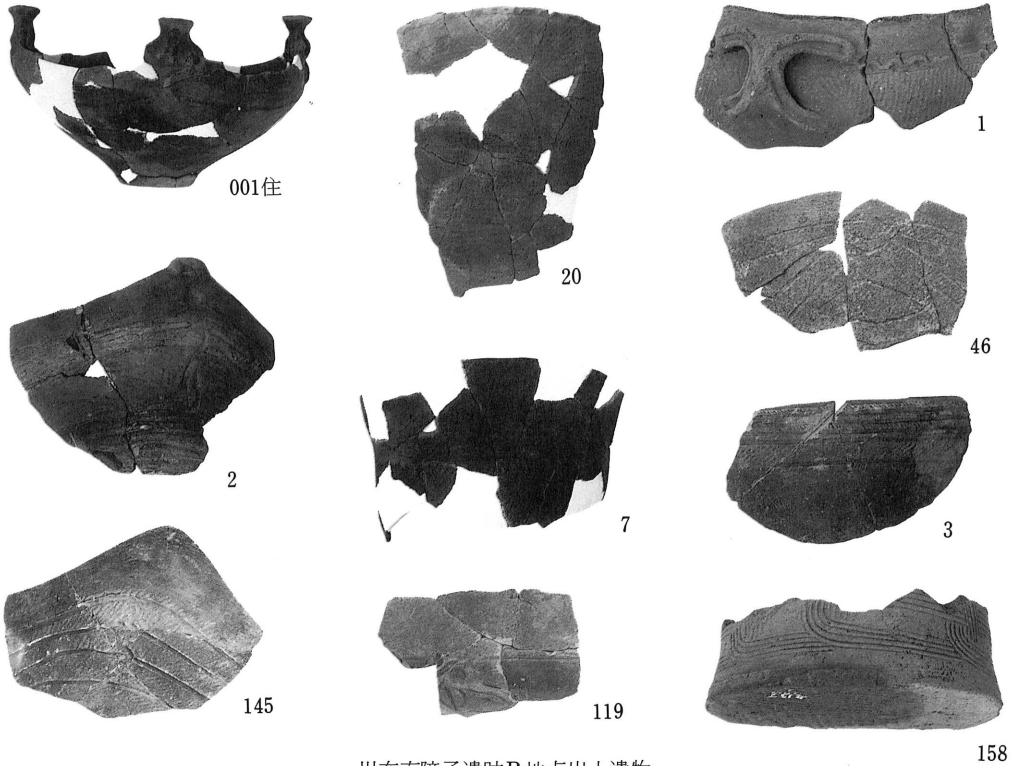


3トレ南端小竪穴全景(東から)



出土遺物(番号は挿図の通し番号、縮尺不同)

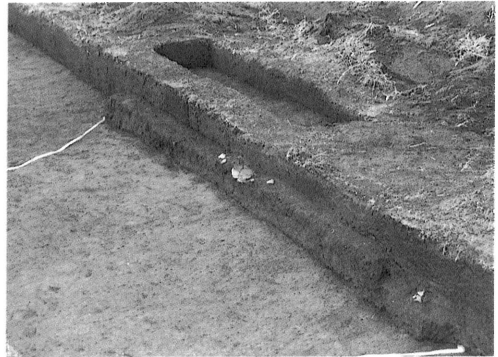




川在南障子遺跡B地点出土遺物

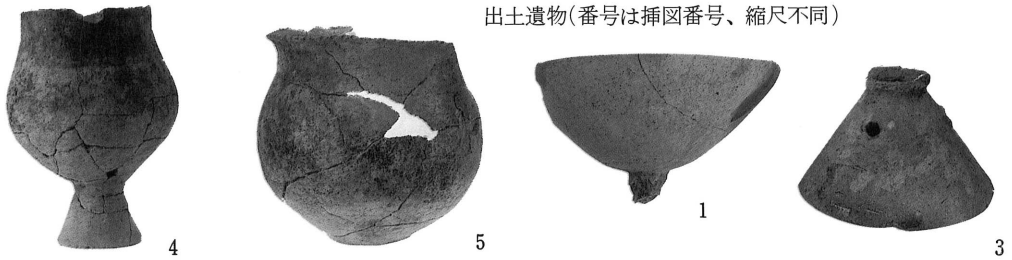


調査区全景(南西から)



3トレ西壁遺物出土状況

出土遺物(番号は挿図番号、縮尺不同)



姉崎六孫王原遺跡E地区

平成3年度市原市内遺跡発掘調査報告

平成4年3月25日 印刷

平成4年3月27日 発行

編集 財団法人 市原市文化財センター

市原市能満 1489 番地

発行 千葉県市原市教育委員会

市原市惣社 1040 - 1 番地

印刷 三陽工業株式会社

市原市五井 5510 - 1 番地